
極東の鴉

縞白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

極東の鴉

【Nコード】

N5867V

【作者名】

縞白

【あらすじ】

酒とタバコが相棒で死因。自業自得に二十九歳で生涯を終えた私は、「我が元へ来たれ」という声で異界の魔女のところへ呼び寄せられた。

聞けば彼女の代理で十年間の兵役につくものが必要で、それが済んだら自由に生きて良いという。「契約してくれるか？」と問われるのに、興味をひかれて答えを返した。「おいしいお酒が飲めるなら」

酒に酔いつつ異界を歩く、変わりものの魔女のお話。（登場する

地名に深い意味はありません。
(

第一話「始まりの契約」

酒とタバコが相棒で死因。

自業自得に二十九歳で生涯の幕を閉じ、生まれ育った世界から去った。

けれど、それが本当の終わりではなかったようで、ある時ひとつの声が聞こえてきた。

「自由なる魂よ、我が元へ来たれ」

やわらかな女性の声だ。

私はその声に引き寄せられ、それまでいたところから落ちた。

落下先は、石造りの広い部屋。

ドアも窓もなく、本がギッチリ並べられた書棚や、実験器具らしき道具が無数に放り込まれたガラス戸棚が並べられているせいで壁も見えない、四角い密室だ。

書棚に入りきらない本が床に積まれ、戸棚に入りきらない道具が木箱からあふれて部屋を占領しつつある。

そんな部屋の、あちこちに置かれたロウソクの灯りの中。
シンプルな紅のドレスをまとうて同色のとんがり帽子をかぶり、
首飾りや指輪や腕輪などのアクセサリーできらびやかに身を飾った
黒髪の女性が、木箱の一つに腰掛けて私を見ていた。

部屋の中央の床に描かれた複雑な文字と図形（魔法陣っぽい）
の上、ただふよふよと浮かんでいる私に、穏やかな微笑みを浮かべ
た彼女が言う。

「自由なる魂の君よ。我が呼び声に応えしものよ。
我は讓葉ゆずりは一門の当主たる魔女。現世うつしよが名は、椿つばき。

我との契約に同意するか？」

契約って、何の？

「わたしは君に体を与えることができる。だがそれを受けたら、君
はこれより十一年の間、わたしの意志に従って生きなければならな
い。

十一年間役目を果たしてくれれば、後は自由だ」

ほー。

それ、引き受けたらどんな体をくれるの？

「君の後ろに用意してある」

言われて振り向いた先にあつたのは、透明な液体で満たされたガラス製の棺ひつぎの中で眠る、成人女性の体。

切れ長の眼も形の良い鼻も薄い唇も、何もかもが私を呼んだ女性とそっくりだ。

見る人によつては「美しい」と言えなくもない、黒髪黒目の狐顔。小柄だけど極度に痩せているわけではなく、健康そうに見える。

「わたしの複製体コピーだ。この契約に同意してくれるなら、君はその体に宿つて一年ほど力慣らしをした後、わたしの双子の妹として十年間の兵役につくことになる。

長命種メトセラは佐官始まりだから、「東方連合軍の譲葉少佐」だな。

もつとも長命種に与えられる階級はただの飾りで、佐官といつても部隊を指揮する権限は無いのだが。書類から健康まで、身の回りのすべてを管理してくれる専属の護衛官がつけられる程度に待遇は良い。

護衛官が監視役でもあることや、命令一つで困難な戦いを強いられる任務に従事しなければならぬことに抵抗がなければ、衣食住には困らない快適な環境と言えるだろう」

うーん。

私は軍隊に入るところか、戦ったことさえないんだけど。

魔女さん、人選間違えてない？

「間違いはない。わたしはいくつかの条件を付けて魂を呼び、それにぴたりと当てはまる君が降りてきて今ここに在るのだから。」

それに、戦うことについてもさほど心配する必要はない。用意した体にはすでにある程度の知識を仕込んであるし、兵役につく前にひと通り、わたしが魔法の使い方とこの世界での戦い方を教える。さて、これでどうだろう。」

自由なる魂の君よ。わたしと契約してくれるか？」

ここまで言いきれるということは、私でかまわないものなのだろう。

魔法を使って戦うなんて、映画やマンガの世界に入るみたいで面白そうだ。

興味をひかれて答えを返した。

おいしいお酒が飲めるなら。

×
×
×

ガラスの棺で眠る女性の中に入れられ、定着するまで一ヶ月ほどかかった。

魂が体に馴染むのを待つ間、私は椿が体に仕込んだこの世界の知識を興味深く飲みこみ、外へ出て別の部屋へ移されると、葡萄酒ワインと思しきお酒のボトルをもらって上機嫌でイスに座った。

椿は向かいのイスに座り、どこからともなく現れて膝の上に乗った白い猫の、美しい毛並みを撫でながら紹介する。

「この子はわたしの使い魔だ。今は猫の姿をしているが、他にも様々な姿に変化することができる。今後、君のそばにいて補佐をしてくれるから、仲良くやってくれ」

主の膝の上で丸くなった使い魔は、金色の瞳に私を映して口を開いた。

「ぼくの名前は漣レン。『紅の魔女』に仕える『万形の守護者』と呼ばれることもある、椿に造られた魔法生物だよ。

食べたものの姿になれる能力があるから、君の望む生き物の姿になれる。これからよろしくね、名無しのお嬢さん」

おお。猫が喋ってる。

ひらりと手を振って「よろしく」と答えつつ、今更ながらファンタジーな世界に来たものだと思った。

使い魔と名無しの複製体の挨拶が終わると、椿は軽く指を振ってどこからともなくグラスと肴さかなを取り出す。

私は腕に抱いたボトルからグラスにお酒をつぎ、アルコールの甘

い香りに微笑んだ。

これだよ、これ。待ってましたー。

椿は片方のグラスを取り、軽く持ち上げながら言った。

「まずは無事の誕生を祝して一杯。新しき君に、おめでとう」
「ありがとう」

グラスをカチンと鳴らして飲んだそれは味も葡萄酒で、私は至福のため息をつきながらイスに沈む。

ガラスの棺が置かれていた薄暗い石造りの密室と違い、巨大な木の虚うつろを利用して造つたのだという現在地のこの部屋は、窓が大きくとても明るい居間だ。リビング

窓には硝子をはまっていけないのに、虫が入るところか風さえも吹いてこないという不思議な空間だが、何らかの魔法がかかっているのだろう。

なにしろ部屋の主は魔女だ。

窓の向こうにひろがる冬枯れた森を眺めながら、のんびり葡萄酒を飲んでいると、椿が言った。

「まずは名前を決めよう。候補をいくつか書いておいたから、気に入ったものを選んでくれ」

これはまた、たくさん考えてくれたものだ。

渡された紙にずらずらと並ぶ名前候補を眺めながら、酒の肴に出された乾燥果実をつまむ。ドライフルーツ

椿が体に入れておいてくれた知識の中には、三種類の言語があった。

この世界の「共通語」と、今私たちがいる地域で昔使われていたという「旧言語」、そして魔法を操るために必要な「古語^{リグン}」。

どれも一カ月では完全に飲み込んでいるので、共通語で話しながら旧言語で書かれた名前候補を見るのに苦労はない。

「露草^{つゆくさ}にする」

ひととおり候補を見て一つを選ぶと、「ずいぶん簡単に決められるのだな」と椿がつばやいた。

「わたしがそういう魂を呼んだのだから、当然のことなのだろうが。君は新しい体への抵抗感や、元いた世界への未練はないのか？」

「抵抗感や未練か」

昔から冷淡な私の、唯一の心の拠り所だった家族は、七年前の交通事故であっけなく逝ってしまった。

それが理由だと言うつもりはないが、その事故で生活が一変した後、気がつけば何にも執着を持たない刹那的な生き方をするようになり、酒とタバコに溺れていた。

「ここがどこだろうと、おいしいお酒が飲めるならそれでいい」

グラスを傾けて異界の葡萄酒を味わう私に、椿は「そうか」と頷いて話題を変えた。

「では話を進めよう。まずは君がこの世界の知識をうまく取り込めたかどうかの、確認だ」

第二話「今生の世界」

この世界についてどの程度理解できているか、椿に問われて一ヶ月がかりで飲み込んだ知識を振り返る。

久しぶりに飲むお酒に気を取られて忘れかけていたが、ここはなかなか面白そうな世界だ。

まず興味深いのが、世界地図。

これが二十一世紀の日本で生まれ育った私が学んだ現代の世界地図と、ほぼ同じ形をしている。

細かな部分ではいくつかの島がなくなっていたり、大西洋に「海底都市」などというものがあつたりするが、大陸の形や位置はそっくりそのまま。

前世の記憶を思い出しながら話すと、椿は「ほほう」とうなって瞳を輝かせた。

「君はわたし達のいるこの世界と、とてもよく似た世界から来たということか」

「断定はできないけど、大陸の形や位置はほぼ同じに見える。太陽が東から出て西に沈むのも、夜には月が出るのも同じ。」

ただ、私がいた世界には椿みたいな魔女も、漣みたいな使い魔も

いなかった。すくなくとも、私の知る限りでは」

「ふむ？ 世界の形は似ていても、そこに住む生き物は異なるのだな。これは面白い。」

露草はどこに住んでいたんだ？」

軽く指を振って世界地図を取り出した椿に、右端にある日本列島の中央付近を指さして「このへん」と答える。

すると現在地もその辺りだと言われたので、なんだか納得した。

「昔、何かで読んだ覚えがあるな」。記憶が古すぎてうる覚えだけど、“パラレルワールド 並行世界” っていうの？ ある一点から分岐して、交わることなく並んで存在するもう一つの世界がある、とかなんとか。

魔法を使える人がいて、異能者の存在が認知されてる以外は、私がいたところとほぼ同一の世界なのかも。

暦も太陽暦で、一月から十二月まで。一年は三百六十五日で、この地には四季がある。他にも共通語は英語っぽいし、旧言語はほぼ日本語。漢字とひらがなとカタカナで構成されてて、漢字は見覚えのないのも混じってたけど、なんとなく意味はわかる」

「にほんご？」

「ん？ あー、“日本”は、というか、“国”は存在しないんだっけ？」

妙なところで通じない会話に首を傾げながら訊くと、現在のこの世界には「国」という概念が無いのだと言われた。

「昔は大きな国も小さな国もたくさんあったらしいが。千年ほど前

に起きた戦争で、どこかの間抜けが兵器として“繁殖機能を持った戦闘用の魔法生物”などというものを造りだしてくれたおかげで、とんでもないことになったからな」

世界地図はそっくりでも、ここには私の故郷とはだいぶ異なる文明が築かれている。

その原因と思われるのは、人間の中にたまに生まれる、^{メトセラ}長命種や異能者と呼ばれる特異な存在だ。

長命種は先天的に「魔力」と呼ばれる力を備え、その力を糧に特殊言語「^{ルーン}古語」を操ることで様々な現象を起こす能力を持った人々のこと。

そうして起こされる現象は「魔法」と呼ばれており、熟練者は古語による呪文の詠唱なしで魔法を使うこともできる。

定期的に休眠をとりながら長い時を生きることから「長命種」と総称されるが、一般的に男性は「魔法使い」、女性は「魔女」と呼ばれている。

もう一方の異能者は、長命種よりも謎な存在だ。

古語を唱えることもなく自在に火や水を操ったり、手を触れずにものを動かしたりすることができるが、その原理は不明で、現在も研究中。

力の種類や強弱は千差万別で、彼らの力を測定する装置がいまだ開発されていないため、力が弱い人は自分が異能者であることに一生気づかず、普通の人としてすごす場合もあるという。

出生率は異能者の方が多く、長命種は年々生まれにくくなってきている。

長命種は「生まれやすい血統」や「生まれにくい血統」があるが、異能者にはそういった系統的なものがみられないというか、まだわかっていない。

そして彼らは、特に長命種たちは、この世界に多大な影響を及ぼした。

まず良い点では、危険な動物を退治して人々の生活に必要な道具を作り出し、文明の発展に貢献した。

彼らは自分たちの住む世界の探索を積極的に進め、各地で見つけられたり造られたりした国々と交易を始めたので、人々の生活はより豊かなものになった。

そして悪い点では椿の言う「どこかの間抜け」が、交易の利権をめぐって対立した国々の戦争の道具として“繁殖機能を持った戦闘用の魔法生物”を造りだした。

それらは造り手たる長命種のもとから逃げたりはぐれたりして野生化し、世界各地の砂漠に棲みついて周辺の動植物を捕食しはじめる。

後に「魔物」と呼ばれるようになるそれらは貪欲で、砂漠を拠点にあちこち出没して暴れまわったので、人間たちは甚大な被害を受けた。じんだい

そこで、「同じ人間同士で争っている場合ではない」と気づいた誰かの指揮のもと、長命種や異能者も含め、協力して魔物を退治しようとした。

しかし。

「今度は二番目の馬鹿が“乾燥に強くて自衛できる植物”を造りだして、状況を悪化させてくれた」

「二番目の馬鹿」は魔物の棲処となっている砂漠を緑化して消してしまおうと、乾燥地帯に強く、魔物に襲われても自衛できるくらい強い植物を造った。

椿が「狙いは良かったのではないかと思うが」と残念そう言うように、その考えは理解できるが、色々やり方がまずかったらしい。

それは一つの砂漠に植えられたとたん、すさまじい勢いで増殖して他の大陸にまで渡りながら、よりいつその繁栄のために自身の内部構造を変異させてしまった。

そうして初めは「魔物の攻撃に対して自衛する」だけだったのが、「敵と判断したもの（人間も含む）に攻撃する」危険種の植物となりながら世界中で繁殖し、砂漠に加えて「近くの森でも危険地帯」という、現在のわりと深刻な状況を生み出す。

結果、こんな状況では「国」という大きな単位の集団は維持できなくなり、世界各地に魔法の結界で守られた「核都市」や「地下街」が造られて、人々はそこで生活するようになった。

「おー」

思わず拍手しながらつぶやく。

「見事なまでの自滅への道行き」

葡萄酒を飲みながら、椿はのほほんとした顔で頷いた。

「間抜けが一人、馬鹿が一人いたというだけで世界中が迷惑するのだから、困ったものだ。しかし今さら何を言ったところで過去は変わらないのだから、それぞれが自分にできることをして生きていくしかない」

それで「今できることをしよう」と、世界各地にある核都市が同盟を結んで『世界統合機構』を組織、大西洋の海底に都市を造って中央拠点とした。

ちなみにこの海底都市は「セントラル・シティ中央都市」の意味で【セントラル】と呼ばれており、「アトランティス」や「ムー」ではないというからちよつと残念。

まあ、オカルト系はあまりよく知らないのだが。

「君には『世界統合機構』の一部で、アジア地区の守りの要である東方連合軍に入ってもらおう」

椿の声で我に返り、細切りにされた干し肉をかじりながら確認した。

「長命種には定期的に十年間の兵役につく義務があるんだっ たね」

「そうだ。わたし達は寿命が長いから、普通の人間より長く軍務に当たるよう義務づけられている。しかし来年からの兵役に、わたしはどうしても行くことができない」

深々とため息をつく椿の言葉を、それまで静かにしっぽを揺らしていた漣が続けた。

「椿は休眠期に入るんだよ。短くて五年、長くて三十年は眠りっぱなしになるから、動けない」

「あー、休眠期。なるほど。でもそれって、兵役の免除とか、延期対象の理由になることじゃないの？」

訊けば、免除にはならないが、「起きた後で兵役につく」と約束すれば延期はしてもらえるという。

だから普通は延期してもらう。

「つまり私を呼んだのは、今が“普通”の状況じゃないから？」

うむ、と頷き、椿は真剣な表情で言った。

「今より三年後、プロジェクト・ユグドラシル『世界樹計画』が第二段階に入る」

第三話「修業のフラスコ生活」

冬の息吹に抱かれて森の眠る三月。

前世の世界とよく似た異界で生きのびるため、魔法の使い方と戦いを学ぶ修業の日々が始まった。

期限は椿の兵役が始まる来年の九月までだから、あまり時間はない。

椿はまず私の右肩へ紅い珠を埋め込むと、魔法生物のことから話を始めた。

「これは君を守護する戦闘型の魔法生物の卵であり、生まれた後にはその棲み処となるもの。魔法生物は君の魔力を吸収して、一カ月ほどで孵化する。

君のために生まれ、君とともに歩み、君の死をもって消滅する一代限りの擬似生命だ。有効に使ってくれ」

魔法生物は自分の珠を持つ長命種メトセラに絶対服従し、多少の怪我を負っても珠さえ無事ならその中で休息をとることで回復する。

そして、基本的に珠を持つ主から遠く離れることはできないのだが、何事にも例外がある。

「珠の所有者である長命種が代理人を指名し、魔法生物が休むためのもう一つの珠を用意すれば、主から遠く離れても活動が可能だ。ただし代理人は主たる長命種と血縁関係にあるか、血の誓約を交わした相手でなければならない」

ついでに椿が私の宿る器として自分の複製体コピーを用意したのは、自分の代理として軍に送り込むものをこの条件に当てはめるためだと教えられた。

（椿には血縁関係にあるものも、血の誓約とかいうのを交わした相手もいないらしい。）

彼女の使い魔である漣には、聴覚と視覚を主と共有する能力があり、休眠期中の椿に外で見聞きしたことを伝えられる。

だから私は彼女の目と耳である漣に必要な情報を収集させるため、その関心事である『世界樹計画』が進行する軍の中へ、彼女の代理人となって漣を連れていく、というわけだ。

なるほどと頷いて、私は右肩に埋め込まれた紅珠を見た。

「この魔法生物も、漣みたいに食べたものの姿になるの？」

「いや。漣は情報収集型として変化の能力を入れたが、それには戦闘型として他の能力を組み込んである。詳しいことは孵化してから説明しよう」

話の次は、魔法の練習。

ある程度の理論といくつかの呪文は体の中に入れられた知識で習得済みなので、「実際に使って慣らしていく」と言われて移動。

フラスコの中にある数分を数時間に引き伸ばした場所という、科学を学んだ身には意味不明な特殊空間に放り込まれ、簡単な魔法から始めてその使い方を学ぶ。

魔法を使う時に重要なのは、体内にあつて魔法という現象を起こす源の力、魔力の扱いだ。

初心者はその扱い方を理解できるようになるまで、補助具として杖を使う。

熟練者は力の増幅装置として杖を使うものもあるが、持ち運びが面倒なので、椿のように指輪や腕輪というアクセサリーの形の増幅装置を作つて身につけることが多いのだそうだ。

フラスコの中の特殊な空間で、椿は一緒にお酒を飲む時ののほほんとした様子が思い出せなくなるほど容赦なく課題を出し、私は魔力切れを起こすまでそれをこなしては、倒れるように眠つた。

一カ月が数年に感じられるほど長く、長く、長かつた。

けれど魔法を使うのはとても面白く、自分の体内にある力によつて空中に火の玉や氷の槍が出てくるのは何度やっても飽きないほど楽しいので、苦痛ではなかつた。

そうして面白がりながら課題をこなすうちに補助具の杖は必要なくなり、どの魔法がどれくらい魔力を必要とするのか、自分の魔力があとどれくらい残っているのか、だいたい把握できるようになつていった。

そして体感的には数年後の、現実では転生して一ヶ月後。
いくつかの魔法を呪文の詠唱なしで使えるようになった頃に、右肩の紅珠から私の使い魔となる魔法生物が孵化した。

その姿は、燃えさかる炎の獣。

私が命じたものをたやすく焼き尽くす猛火を吐くが、その炎でできた体が私を傷つけることはなく、足元の草を焦がすこともない。不思議な紅の炎をまとい、長い尾を持つ狼のような形をした獣。何も命令しないでいると、それは漣とよく似た金色の瞳に私を映して行儀よく座っていた。

「戦闘に特化させた魔法生物だ。最優先命令は君の盾となること。漣のように言葉を操ることはできないが、主たる君の意思に従うから剣として使うこともできる。思った通りに動かせるようになるには訓練が必要だが」

漣の説明を聞いて、私はその魔法生物を「シガー」と名付けた。前世で酒とタバコが相棒だった私の使い魔にはぴったりの名前だと、心の中で満足した。

私は漣に連れられてまたフラスコの中へ入り、今度は使い魔の扱い方を学んだ。

シガーは炎を発生させるだけではなく、生み出した炎を変幻自在に操る能力を持ち、燃えさかる猛火を瞬時に消すこともできた。そして訓練するうちに自分が生み出した炎だけではなく、別のも

のが魔法で付けた火にもある程度干渉できるようになったので、火事に遭遇した時などに役立ちそうだなと思った。

第四話「修業の樹海生活」

二カ月のフラスコ生活の後、ある程度の戦闘能力は身についただろうと判断した椿は、私を外へ連れ出した。

あざやかな新緑に彩られる五月。

この世界の主は植物のようだ、と思うほど見渡す限り森がひろがっていて、そこに棲む動物はどれも私を知るものより巨大で強かった。

椿は漣の仮宿となる透明な珠のついた銀の指輪を私に与え、「日が暮れるまでに家へ帰っておいで」と言っつてその樹海に置き去りにした。

すると速攻で匂いを嗅ぎつけた山犬や狐やイタチに襲われて逃げ回ることになり、なんとか逃げのびた後で「森では匂いを消しておかないと襲われるよ」と漣に言われたので、もっと早く教えてくれよと深いため息をついた。

「うーん？ 匂いのことはこの世界の常識だから、言わないといけないなんて思わなかったただけなんだけど。

こんなことも知らないようじゃ、他の常識もたぶん知らないよね？」

「うん」と即答で頷くと、漣はこの世界の歩き方を教えてくれた。

「まず森で気をつけなきゃいけないのは、匂いと音。」

魔物や獣たちは匂いに敏感で、危険種の植物は音に敏感なんだ。森の中で戦うことになったら、その音で近くの危険種の植物に敵と判断されて攻撃される危険があるのを覚えておいて。

基本的に危険種の植物は外見で判断できなくて、枝とか蔦とか根っこが動きだしてから「これ危険種だった」ってわかるものだから、あと、大きな川や湖や海の深いところには又シが棲んでるから、そういうところに入る時はうっかり丸飲みされないよう気をつけてね」

「又シ？ 又シって、魔物？」

「水底に棲む又シは龍だよ。露草の世界にはいなかったの？」

「神話とか物語の中にはよくいたけど、見たことはないな」

「ふうん？ じゃあ一応説明しとくね。」

龍は魔物と違って必要以上に生き物を襲ったりはしない。ただ水底の深いところに棲んでいて、通りすがりの生き物をぱくつと丸飲みにしてごはんにするだけ。生息地はアジア地区で、数は少ない。

ただ、歳をとった龍は特別なんだって。ぼくは話を聞いたことしかないから詳しくは知らないけど、龍は歳をとるとすごく賢く強くなつて、気が向くと人間の守護についてくれたりもするらしいよ」

それでアジア地区のとある核都市には、長命種の守護となり、ついでにその人が住む都市も守っているという白龍がいるらしい。

最後の方は今の私には関係ない話だけど、深い水底には危険がひそんでいる、というのは重要な情報だ。

「ありがとう」と礼を言って、これから色々教えてねとお願いした。

それからしばらく、葡萄酒ワインを入れた小ビンをポケットに突っ込んで、樹海を渡る日々が続いた。

外から見るとただの巨木としか思えない樫の隠れ家は伊豆半島辺りにあり、当然のように樹海の中にあるのでわかりやすい目印はない。

唯一の道標は、視覚と聴覚を共有しているという彼女の使い魔だ。漣はどこにいても正確に樫のいる方向を示して「こっちだよ」と教えてくれるので、私は野生動物や魔物や危険種の植物たちと戦ったり逃げたりしながら毎日、魔女に置き去りにされたところからわりと必死で帰宅した。

そして樫の予想より早く帰宅できるようになると、今度は数日ばかりでしか帰れないところへ置き去りにされるようになった。

私は大振りのナイフを片手に葡萄酒のボトルを担ぎ、長期間の野外生活について学ばされた。

そういえば、マンガや小説などで狩りや解体への忌避感や葛藤について読んだことがあったが、幸い私にはそれほど苦にならなかった。

樫の家にたどり着く前にお腹が空くと、漣に教えられたことを自分なりに理解して兎や鹿を狩り、さばいてシガールの火で焼き、香草や木の実で味をつけて食べている。

発泡スチロールのパックにきれいに並べられたものを食べるのに
対し、自分で狩ったり採ったりしたものだけが食べられるというの
は、むしろ動物として健全な生き方をしているように思えて行動に
納得できたから。

ただひとつ。

「いただきます」

前世ではさして何とも思わなかったのに、食事の前に手を合わせ
てそう言う習慣がついた。

椿の指示による修行はだんだんと難しく厳しくなっていき、秋頃
になると魔物の巣になっている小さい砂漠の真ん中だったり、危険
種の植物の繁殖地だったりするとところに置き去りにされるようにな
った。

私は出かける時には多めにお酒を持っていくようになり、それを
持ち運び続けるのに、いつの間にか腕力も鍛えられた。

椿は晩夏の頃に一度、「あまり飲み過ぎるのは良くないだろう」と
言い出したが、何度かお酒が切れた時の私の様子を見ていた漣の
言葉を聞いて、禁酒令を下すのは思いとどまってくれた。

私はとくに迷惑をかけたつもりはなかったのだが、漣によればお
酒が切れた時の私は「大型の魔物より危険」なのだそうだ。

「露草はお酒が切れると不機嫌で無愛想で凶暴になるから、お酒は与えておいた方がいいよ。飲んでる時は上機嫌で、泥酔はしないし。椿も見てたでしょ？ お酒が切れた時の露草に手を出すのがいると、辺り一帯を無差別に攻撃し始めるから、近くにいたるべくまで危ないんだよ」

えらい言われようだなと思ったけど、「露草にはお酒を与えておくべきである」という私的にお得な意見だったので、黙って聞いていた。

秋が過ぎると冬が来て、雪が降った。

樹海生活にはだいぶ慣れたと思っていたけど、寒さというのは魔物や危険種の植物たちとはまた違った意味で大変な強敵だった。

修業の途中で凍死しかけた私を拾い、椿は治癒魔法の使い方を教えながら治療して、寒さをしのぐための魔道具の作り方を教えてくれた。

そういうものはもつと早く教えといってくれよと思いつつ、他にもいろんな魔道具や魔法薬の作り方を聞いて、実際に作ってみる。

しかしそのどちらを作るにも、魔物の鱗や眼球や心臓石、危険種の植物の葉や根や実など、特殊な素材が必要だった。

魔物は元が長命種に造られた魔法生物なせいか、死ぬと体の一部が結晶化するという性質があり、その結晶化した部分に多くの魔力が含まれているので、良い素材になるらしいのだ。

そして同じく危険種の植物も長命種の魔法によって改造されたも

ので、しかもより繁栄するために自分で様々な構造変異を起こしてきているため、他の植物より有用な素材になるという。

そこで当然、次なる課題は「素材の採取」。

「ちよつと取っておいで」と椿に魔物の巣や危険種の植物の繁殖地へ放り込まれ、目的外の魔物や危険種に襲われながら目指す素材を持つ標的を探し出して挑み、半分ほど死にかけつつ素材を掴んで逃げ帰るという生活が続いた。

たぶん、逃げ足はかなり速くなった。

改めて考えてみれば心荒^{すさ}みそうな日々だったが、椿がお酒を切らすことなく与え続けてくれたので、魔物の牙や危険種の鳶に狙われていなければさして気にせずのんびり過ごせた。

どうやって手に入れてくるのか、椿は葡萄酒だけでなく、にぎり酒や焼酎なども飲ませてくれて、どのお酒もそれぞれにおいしかった。

そして冬から翌年の九月まで、魔道具や魔法薬を作るのに没頭。私は「酔っぱらいにしては器用だね」と漣に言われる程度には細かい作業ができたし、椿の指導でそこそこ強い魔物を狩って良質な素材を持ち帰ることもできるようになっていたので、わりと良いものを作ることができた。

椿が休眠期のための長い眠りにつくまでに。

私が東方連合軍に入るまでに。

準備はゆつくりと進み、私は首飾りや腕輪などのアクセサリーに仕立てた魔道具を一つずつ増やし、傷薬や毒消しから水中でも息ができる薬や体が浮かぶ薬まで、さまざまな魔法薬をつめた小ビンを増やしていく。

椿は最後に“見た目よりもたくさんのが入れられて、持ち運びに便利な軽くて小さい鞆”の作り方を教えてくれて、「修業はこれで終わりだ」と宣言した。

私は長いようで短かった修業の日々の師匠に「ありがとうございました」と礼をしながら、この鞆、一番最初に欲しかったよと心の中でつぶやいた。

第五話「出立前夜の酒宴」

まだ暑気が残る晩夏の八月末。

椿の故郷であり戸籍登録地となっている核都市、奈良県辺りに位置する【大和^{やまと}】へ行く前日。

休眠期に入る前の椿と話せる最後の日に、私達はいつもと同じように巨木の虚^{うつろ}に作られた居間のイスに座ってお酒を飲んでいた。椿は膝の上に白い猫を抱いてグラスを傾けながら、向かいに座った私の格好を見て苦笑する。

「露草はどうも黒が好きなのだな。鴉のように全身真っ黒だ」

「うん。元の世界にいる頃からよく言われてた。他の色はどうにも落ち着かないから、なんとなく黒いの着てるだけなんだけど。」

椿は？ 紅い服を着てることが多いけど、その色が好きなの？」

「好き？ ふむ。そういう観点で考えたことはないな。」

わたしの場合はいつの間にかこの色が特徴になっていて、物好きな友人がこの色の服を揃えて贈ってくれたから着ているだけだ」

「そりゃー面白い友達だね。……ん？ そういえば前に漣が椿のこ
と、『紅の魔女』とか言ってた？ あと、漣はナントカの守護者だとか」

「『紅の魔女』と『万形の守護者』だな。もう何十年も前の兵役の時につけられたあだ名だから、覚えている人は少ないと思うが。そういえば、わたしにはあとひとり、『無形の守護者』がいると言ったかな？」

「んー。聞いた覚えはない気がする。どんな子？」

「名は薫^{かおる}。わたし以外のものの目に映らないのが特徴だ。休眠中のわたしを守るよう命じてあるから、君と関わることはないだろう」

「薫か。きれいな名前だね」

椿は「ありがとう」と微笑んで、私の目には映らないけど、薫が通り過ぎると金木犀^{きんもくせい}に似た匂いがすると教えてくれた。

昨年からの生活のなかで、それほど唐突に金木犀の匂いを感じたことはないから、私の近くには来ないようにしているのだろうか。そう、と頷いて、グラスに葡萄酒をつぐ。

椿も一緒に飲みながら、明日からのことについて話した。

「露草。短い時間の中で、君はわたしが思っていたよりだいぶ強くなったが、まだまだ経験不足だ。それをよく自覚しておきなさい。君の役目はわたしの代理で十年間の兵役につくことで、無茶な軍務で死ぬことではない。無理だと思ったら素直にそう言えば、可能なら上は別のやり方を考えてくれる。兵役についてくれる長命種を一人を失うというのは、軍にとって手痛いことだからな」

「軍隊」というとすごく厳しそうなイメージだが、有用な能力を

持つ長命種たちに対しては、特別な優遇措置があるらしい。

「魔法はひとつの学問として体系化されているが、その威力は使用者の心身の状態によって大きく左右される、いささか不安定なものだ。

上機嫌な魔法使いが撃つ炎の矢は生木を焼き尽くすが、憂鬱な魔法使いが撃つ炎の矢は樹皮を焦がすことしかできないと言われるくらい、かなりの差が出る。まあ、これはかなり極端な例え話だが。

ともかくそれゆえに長命種には軍服の着用義務さえなく、何を着るのも自由なほどだ。もし軍の施設内でおかしな格好をしているものがいたら、長命種だと思って間違いない」

一種の特権階級なんだなと理解して「異能者も？」と訊いたら、こちらの扱いは違うらしい。

「異能者は数は多いが、戦闘任務に向けた能力の保持者となると少ない。能力の強さで「一級」から「十級」まで格付けされていて、この枠に入りきらないほど強いものは「特級」と呼ばれているが、軍内で優遇されるのは特級から三級までだ。

特級や一級はめったにいないが、おそらく【大和】にも二級か三級は何人かいるだろうから、胸の記章を見てみるといい」

記章については実際に見てみるのが早い、と言って、椿は私のことと話を戻した。

「君は表向きには私の双子の妹として、姉の代理で兵役につくことになるが、内情は軍の上層部にいる友人に話してある。顔つなぎは漣がやってくれるから、上からの協力が必要な時は漣に言うといい」

「うん、そうする。……それにしても、私の住んだ国には兵役な

んてなかったから考えたこともなかったけど、家族の代理で兵役に
来ましたって、可能なんだね」

「軍にとつてはそこに一人長命種がいればいい、というだけの話だ。
来年の春から魔物が活性化期に入ると予測されていることもあって、
わたしが延期してくれと頼むより、双子の妹が代理で来ましたと言
う方が喜ぶ」

「なるほど。あれ？ でも、私の分の兵役っていうか、戸籍はどう
なってるの？」

「君の戸籍は【大和】に新規登録済みだ。今までは森で一人暮らし
をしていて、核都市に登録したことがないから兵役もしていなかつ
た、と言えば通る。どこにも登録せず、親から継いだ隠れ家に引き
こもって暮らす長命種は珍しくないからな」

それより漣は椿が死なないかぎり消滅しないし、ここのような隠
れ家の場所もいくつか知っているから、困ったことがあったら都市
を出て隠れ家にこもりなさい、と言われて思わず苦笑する。

椿、なんだか本当の姉みたいになってるよ。

「というか、そもそも兵役に行くために契約したんだから、そこか
ら逃げたら契約違反になっちゃうんじゃないの？」

「いや。君が途中で軍務を離れても、わたしとの契約の違反にはな
らない。“わたしの意思に従って十一年間生きる”のが契約だから
な」

今わたしが許可を出したからそれでいいのだ、と言いきった椿の
膝の上で、白い猫の姿をした使い魔がため息をついた。

「完全に情が移っちゃってるみたいだね、椿。まあ、露草のそばに

いなきやいけないいばくにとつてもその方が都合がいいから、べつにかまわないけど」

そんなんでいいのか？ と首を傾げていたら、ふと思い出した。

「あ。もう一つ訊き忘れてた。かなり今さらだけど、自分の複製体を作って他の世界から呼んだ魂を宿らせるって、やってもいいことなの？」

「いや。普通の魔法使いや魔女であれば嚴重に罰せられる類の、禁じられた魔法とされている。ただ、わたしは「円環の蛇」の魔女だから、これで罰せられることはない」

椿は右手の親指にはめた指輪を見せ、私は初めてそれが“自分の尾をかむ蛇”の形をしているのに気づいた。

おそらく長命種の中でも何らかの特権を持つ地位にいるために、禁じられた魔法の行使が許されているのだらうと理解して頷く。

「とにかく私は自分が生き残るのを優先して十年間軍にいて、その合間に可能な限り『プロジェクト・ユグドラシル世界樹計画』の情報を集めればいいのね？」

「ああ。まずは君の安全、そしてわたしの故郷である【大和】の存続が肝要。十年間、東方連合軍に協力して【大和】を守ってほしい。だが、最優先事項は『世界樹計画』についての情報収集だ。休眠期に入ること理由に途中で外れたが、計画初期に関わったものの一人として、可能な限り様子を見守りたい。

うまくいけば世界から魔物の脅威を取り除けるかもしれないが、下手をすればわたし達が「三番目の阿呆」になりかねない計画だ」

私は「ふうん」と話を聞きながら、空になった椿のグラスへ葡萄酒をついだ。

第六話「讓葉少佐の護衛官」

「お待たせいたしました、讓葉少佐」

食事のトレーを運んできてくれた篠田中尉に「ありがとう」と礼を言い、「いただきます」と箸を取る。

将校用の食堂で私が食事をする間、讓葉少佐の護衛官の一人である彼は、そばに控えて待っている。

初めてそれをやられた時にはなんとも落ち着かなかったが、元からおおざっぱな私は「それが彼の仕事なのだ」と理解すると一日で慣れた。

仕事という意識で行動している人に対して、それを申し訳なく思うことはない。

必要だと思ふなら「御苦労さまです」と感謝すればいい。

x
x
x

凍える冬の息吹に森が白く染まる十二月。

私が椿の双子の妹として核都市【大和】の東方連合軍に入って、三ヶ月が過ぎた。

核都市【大和】は日本風の木造家屋とコンクリートのような素材の建物が混ざって立ち並ぶ、混沌としたところだ。

明るく賑わう表通りや夜に妖しく輝く裏通り、疲れて寂れた貧民街を抱いて、樹海の中に座している。

その中央にそびえたつ高層建築の堅固な城砦が東方連合軍の【大和】支部で、『世界統合機構』の支部。
そして私の現在地だ。

九月。

私は椿に渡された戸籍や兵役についての書類を持って行くとあっさり城砦へ入れられ、その日のうちに初めての戦闘任務を命じられて護衛官の篠田中尉とともに出撃した。

それは何を思ったのか【大和】を取り巻く分厚い外壁にかじりついてきた、数十体のムカデに似た大型の魔物の退治。

外壁の途中にある窓からその様子を見てシガーを呼び、炎で攻撃させると数分でぼろぼろと樹海に落ちて、静かになった。

また上ってきたりしないかどうか様子見に待機しながら、私が紅の狼の首筋を撫でて「さすがシガー」と褒めている間、周囲の兵士

たちはちよつと離れたところから鋭い視線でこちらを観察していた。

護衛官は一線を引いて長命種^{メトセラ}の健康を管理しながらその動向に異常がないか監視し、他の兵士たちは自分たちに害を及ぼさないものかどうかを見極めようとしながら遠巻きにする。

それが軍での長命種の扱い。

漣に教えてもらって記章で見分けた二級や三級の異能者たちも、似たり寄つたりの扱いを受けているようだった。

椿が言った通り、護衛官が監視役でもあることや、命令一つで困難な戦いを強いられる任務に従事しなければならないことに抵抗がなければ、衣食住には困らない快適な環境だ。

三ヶ月の間に命じられた任務は、「ドラゴンワームの心臓石を取っておいで」と言った椿に落された砂漠から素材を掴んで生還するより、はるかに楽なものばかりだったし。

今の様子ならなんとか十年、生きていけるかも。

と、思っていたのだが。

x x x

「露草。そのお茶、毒入りだよ」

隣のイスの上にちよこんと座った白猫の言葉に、湯呑みへののびしかけた手を止めた。

お茶は今、男性兵士が回ってきて「どうぞ」と急須からそそがれたばかりのものだ。

彼は顔を上げた私と目が合うよりも速く、持っていた急須から手を放して袖に仕込んだナイフを抜く。

私はその手に襲われるよりも速く、本能的に左手にはめた腕輪型の魔道具へ起動を命じる。

「束縛せよ、緑の鎖」

陶製の急須が落ちて割れる音が響き、腕輪型の魔道具から高速で伸びた緑の蔦が男性兵士に巻きつく。

その蔦はナイフを握ったまま捕まった彼の首にたどり着くと、容赦なく締め上げた。

「ぐあっ……！」

全身を拘束されて首を絞められ、男性兵士が床に倒れて苦悶の声をあげる。

私を殺そうとしたのだから、相手は敵だ。
殺される前に“対処”しなければならない。

考えるのも思いつのでもなく、樹海生活で体に馴染んだ防衛本能が目覚め、魔道具の効果を観察しながら「第二、第三の敵はいないか？」と周囲の様子をうかがっている。

「おやめください讓葉少佐！ 死んでしまいます！」

私の腕を掴んだ篠田中尉が叫び、そこでようやく理性が本能から手綱を取り返した。

ざわめく周囲の中に他の暗殺者は潜んでいないようだ判断し、なぜか乱れる心に困惑しつつ、魔道具を止める。

篠田中尉は魔道具の束縛を解かれた男の元に駆け寄り、ぐったりとして動かなくなった彼の脈を見ると、生きていることに安堵してから私の方を振り向いた。

その眼差しにこもる嫌悪感を察知して、彼が口を開く前に問う。

「なぜ止めた？ 篠田中尉」

「あなたが彼を殺しかけていたからです。……讓葉少佐」

全身で私を拒絶する篠田中尉に、絶句する。

何？

今の、悪いのは私？

「あなたは魔女にしては優しい方だと思っていたのに、何の躊躇もなく人を……」

言いながら声をつまらせた篠田中尉の姿に、思わず深いため息が

こぼれた。

今の自分の本能的な行動について、間違いをおかしたとは思わない。

おかしいのは中尉の方だ。

護衛対象である私の自衛行動を非難の口調で止め、精神的に揺らした。

もし相手が魔道具の束縛を乗り切れるほど強かったら、その瞬間に反撃に出られていた可能性もある。

平和な世界で安穩と育った私より、この殺伐とした厳しい世界で育った篠田中尉の方が人道に篤いというのは皮肉なものだ。

徴兵制度があるところなのだから、人道的な兵士がいたとしてもおかしくはないのかもしれないが。

何にしても、彼が私の護衛官に向いていないことはわかった。

そして護衛官の声ひとつで心揺らされるといふ現状には問題がある、ということもわかった。

今後は私の方からも護衛官に対し、必要以上の影響を受けないよう精神的に距離を置こう。

騒ぎを聞きつけて食堂に駆け込んできた人々の中に、私のもう一人の護衛官、さめじま鮫島少尉の姿を見つけたので、ついでにこっちの様子も確認しておくかと声をかけた。

「鮫島少尉。私がいきなり襲ってきた暗殺者を逆に殺しかけていた

ら、君は止める？」

「周囲が安全な状況であれば止めます、讓葉少佐」

無愛想で鉄面皮な男は淡々と答える。

私はその理由を問う。

「なぜ止める？」

「暗殺者の目的や背景、侵入経路を調べるには、生かしておいた方が得策であると指導されたためです、讓葉少佐」

それなら納得できる。

「うん」と頷いて席を立つと、襲撃者の近くに座り込んだまま、かすかに肩を震わせた護衛官を呼んだ。

「篠田中尉。高原中將のところへ行こうか」

「それは、それは……、この男について報告するためですか？」

「それもあるけど、君の転属願いを出そうと思って」

「わたしを護衛官から外すと？」

そりゃー君、そうしないとマズイだろう。

「なぜですか？」

すこし考えればすぐわかりそうな質問に、面倒だなと思いながらいつもの口調で答えた。

「食事をしている間、君が後ろにいるのは落ち着かないと思うから

だよ、篠田中尉」

第七話「通路門の運用任務」

「露草のお茶に毒入れたの、『エイリー教』の信者かな？」
「なにそれ、宗教？」

夜、城砦の近くにある宿舎へ戻ると漣が言った。

「あれ？ ぼくまだ説明してなかったっけ？」
「聞き覚えがないから教えてー」

ばったりとベッドの上に倒れ込んで頼むと、近くのイスに乗った白猫はぶらりとしつぽを揺らしながら答えた。

「『エイリー教』は、簡単に言くと「魔法のない世界を造りましよう」って人たちの集まり。」

魔物が造られたのと同じ時代、千年くらい前にできた新興宗教で、その頃特権階級を満喫してた長命種^{メトセラ}たちの横暴に怒ったエイリー・ブランウェルって女の人が、長命種の支配からの脱却を訴えて教祖になったんだ」

それまで魔法や魔道具の恩恵を受けて発展してきた文化の中で、エイリーの言葉に賛同する者は最初少なかった。

しかし魔物の出現で「長命種に頼りきって権力を持たせておくと危ない」という考えが広まり、一気に信者が増加。

彼らは教祖であるエイリーが平和主義者だったことから、基本的

に長命種との戦いは望まず、話し合いによる解決を求めながら自分たちの街を造って、そこで「魔法や魔道具に頼らない生活」を実現させた。

今では『世界統合機構』にもその存在を認められ、「地下街」である彼らの街を「核都市」に格上げしようかという話まで出ているという。

「ん？ 長命種嫌いの人たちの街を核都市にしようってというのは、ちよつと無理なんじゃないの？」

漣の説明の矛盾に、寝転がったまま首を傾げる。

「核都市」と「地下街」の違いは人口や規模ではなく、「通路門ゲート」と呼ばれる大型魔道具が設置されているか否か、それを運用する長命種がいるか否かだ。

「通路門」があつてそれを運用する長命種がいれば、そこは「核都市」。

二つのうちのどちらか、あるいは両方とも無ければ、地上にあつても「地下街」と呼ばれる。

陸上の大部分を魔物と危険種の植物に取られている人間たちにとって、大量の人や物を一瞬で遠く離れた場所に送ることができる「通路門」の価値は、それほど大きい。

「通路門」を管理する軍が、長命種を欲しがる一因だ。

もちろん「通路門」も万能ではなく、許容範囲内にあるもう一つの「通路門」へ、両側から長命種が操作した時にだけ転送可能、と

いう制限が付いている。

しかしそれでもなお、危険をおかして危険種の植物が潜む樹海を渡ったり、空を飛べる魔物に襲われる覚悟で飛行船を出したりするよりは、はるかに安全で確実に便利。

「『エイリー教』の信者にも、いろんな人がいるんだよ。『通路門』だけなら、一時的に認めて受け入れてもいいだろうって人がいれば、それは墮落だ、教祖に対する侮辱だって言う人もいる。

そしてその中には、「魔法のない世界を造るには、長命種を根絶やしにすればいい」と考えて、それを強制的に実行しようとする人もいる」

「あー……、なるほど」

事情はわかったけど、都市の中にも危険があるのだと知って疲労感が増した。

今日はもう寝よう。
でもその前にひとつ。

「漣、お茶に毒が入ってるって教えてくれて、ありがとね。漣がいなかったら、私は今ここにいなかった」

「ぼくはぼくの役目を果たしてるだけだから、気にしないでいいよ」

漣はさして得意がるふうもなく、さらりと言った。

「ぼくは情報収集に特化されてるから、感覚が鋭いんだ。これからもぼくがそばにいる限り、露草に危ないもの食べさせたりしないから、それだけは安心して」

「うん。漣のことは、信じてる……」

とてもほっとして、答えながらいつの間にか眠りに落ちていた。

翌日から、私の護衛官は鮫島少尉と芳野中尉になった。

そして数日後。

暗殺未遂事件は高原中将から「処理が終わりました」と言われ、詳しいことは何も知らされずに終わった。

×
×
×

魔女である讓葉少佐に与えられる任務は、戦闘に関わることが多い。
い。

普通の人間が対処するには厳しい魔物が都市の外壁を攻撃してきたり、【大和】と近隣の地下街を結ぶ地下^{メトロ}鉄道のトンネル内に危険種の植物が出てきたりすると、「行って排除してこい」となるのだ。他にも魔道具開発部から「魔物の素材が必要だから取ってきてくれ」という依頼が来たり、薬学研究部から「危険種の植物の一部を

採取してきてくれ」という依頼が来たりして、私の上官で長命種を統括する高原中将が、それぞれの任務に適した人材を選んで命令を出している。

そしてそういう戦闘任務の合間に、たまに「通路門」の運用任務が回ってくることもある。

これはちよつと気を使う繊細な仕事を要求されるが、移動も戦いもないから体力的には楽だ。

私の場合、飲酒量をいつもより減らさないと失敗しそうになるので、多少ストレスがたまったりはするが。

「こちら【クアラルンプール】。転送準備完了。これより「通路門」の同調を開始する」

白い陶器の器に張られた水の中に根をひろげ、水上には瑞々しい緑の葉とラッパ型の白い花を咲かせた植物から聞こえてくる声に返事する。

「【大和】了解。「通路門」の同調を開始する」

「通路門」管理室の机に設置された色とりどりの水晶柱のなかで、【クアラルンプール】と書かれた札のかかった紫色の水晶柱に手をかざし、慎重に魔力を送り込む。

机の前の壁はガラス張りになっていて、向こう側にある体育館みたいに広い部屋の床に描かれた巨大な魔法陣が、淡い紫色の光を帯びる様子が見おろせた。

「同調を確認。転送する」
「了解」

水上に咲く植物の形をした遠距離通話装置の向こうの声に答え、物資が転送されてくるのを待つ。

その数秒後。

分厚いガラスの向こうで強い輝きを放った魔法陣の上に、それまでは無かった大量の木箱が出現した。

私は数秒待つて水晶柱に魔力を送るのを止め、輝きを失った魔法陣の上の物資を確認した担当者が「問題なし」の合図を送ってくるのを見て連絡する。

「【大和】転送を確認。異常なし。「通路門」の同調を終了する」
「了解」

向こうから短い返答がきて、転送作業の一つが完了。

魔力の制御にいくらか慣れた長命種なら誰でも運用できる仕様になっているので、今のところ私も失敗したり事故を起こしたりしたことはない。

ちなみに「通路門」の内部構造については“管理”の方が担当する仕事なので、“運用”の私は関知しない。

その辺りは、前の世界で仕組みを知らない電話やパソコンを使っていたのと同じことだろうと思っている。

山積みの木箱を魔法陣の上から運び出す作業が始まるのを見ながら、「ほー」と息をついていると、そばに控えていた鮫島少尉が言った。

「次の転送は三十五分後です。休憩なさいますか？ 讓葉少佐」

「うん。すこし休むから、五分前になったら起こしてくれる？」

「了解しました」

椿に教えてもらって作った便利な大容量鞆（ベルトポーチの形にして腰に装備）から小ビンを取り出し、少なめにひとくち葡萄酒^{ワイン}を飲んでから、部屋の隅にある木製の長イスにごろんと寝転がる。すると鮫島少尉が近くに来て、片膝をついた。

「少佐、頭をすこし上げてください」

言われるままひょいと頭を上げると、丸められた彼のコートが枕代わりにそこへ置かれた。

木製の長イスは寝心地悪いが、頭の下にやわらかいものがあるとだいぶ気分が違う。

「ありがとう」

遠慮なく彼のコートを枕にさせてもらいながら言うと、普段まるで表情を動かさない鉄面皮が一瞬、かすかに動揺した様子で動きを止めた。

どうかしたのかと様子を見てみると、「いえ」と短く言ってさっさと離れる。

今の間は何だ？ と、ちょっと不思議に思ったけど、訊いて素直に答えそうな男ではない。

彼が自分から言わないのなら、とくに問題ないのだろう、と判断して目を閉じ、短い休息をとった。

第八話「二つの任務」

暗いトンネルをひた走る地下^{ストロ}鉄道に乗って、鮫島少尉と北の地下街^{おづみ}【近江】へ向かう。
がたん、ごとな、と意外に静かに走る列車の中でうとうとしていると、途中で一度、起こされた。

「讓葉少佐、危険種の根の発見報告があつた地点に到着しました」
「んー……」

「ぼー、と寝ぼけながら鮫島少尉の指示に従い、いつの間にか停まっていた列車から線路へ降りた。
トンネルの一部を破壊して繁殖しようとしている危険種の植物の根っこを、手分けして探して退治して、応急処置的に穴をふさぐ。」

「任務完了を確認。お疲れ様です、讓葉少佐」
「はい、どうも」

ぐびつとひとくち葡萄酒^{ワイン}を飲んで車両に上がると、またまどろみに戻る。

そうして半分寝ている間に、列車は【近江】へ到着した。

今日の任務は二つ。

地下鉄道のトンネルに出現した危険種の植物の根の除去と、琵琶

湖の浅瀬ににいるという水棲の危険種を捕まえ、魔法薬の素材となる実を採取してくるという簡単なものだ。

一つ目はもう終わったので、あと一つ。

地下街と呼ばれながら主に地上に集落を持つ【近江】を出て、湖へ向かう。

移動手段は飛行できる魔物に変化した漣だ。

ある程度【近江】から離れた樹海の中で変化した漣に乗ると、敵だと思われて撃ち落とされることのないよう姿隠しの魔法をかけ、一気に琵琶湖まで飛んでもらう。

「琵琶湖は古くからヌシが棲むと有名な湖です。目的の危険種は比較的活発に動く肉食性ですから、餌を用意して釣りましょう。

可能な限り湖を騒がせないよう、一気に陸上へ引きあげてください。かかったものが何であれ、その後は私が処理します」

湖のほとりで鮫島少尉の注意と指示に「了解」と応じ、足元の雑草を引き抜いて魔法をかけて、丈夫で長い蔦状のものになるよう加工。

その蔦の先端に、鮫島少尉が生け捕りにしてきた小型犬サイズの野鼠を結びつけ、触れた物をくっつける魔法をかけた。

後は自分の体に強化魔法をかけて、準備完了。

雑草で作った臨時の釣り糸を、湖の浅瀬へ放り込む。

まだ生きている野鼠がもがいてばちゃばちゃと湖の水面を叩くの、間もなく獲物がかかった。

真下からきた大きな口がばくんと野鼠を飲み込んだ瞬間、私は力任せに右へ振って、餌に食らいついた獲物を陸上へ放り出す。現れたのはコイに似た巨大魚だ。

待ち構えていた鮫島少尉が腰の刀を抜いて、一刀両断。その頭部を斬りおとす。

あまりにも鮮やかな動作に、すぱっと切り離された頭部と胴体から、数秒遅れて体液が噴出した。その時にはすでに私も鮫島少尉も退避済みなので、どちらも返り血を浴びることはない。

「次の餌にはこの魚を使いましょう。讓葉少佐は釣り系の準備をお願いします」
「了解」

なかなか目的の危険種がかかってくれない上、一体で数個の実しか採れなかったので複数体捕まえなければなくなり、合計十三回の一本釣りをするはめになって正直疲れた。

しかしなんとか必要量を採取できる分だけ釣りあげたので、最後の一体から手際よく実を採る鮫島少尉を待つ間、近くの岩に座って葡萄酒を飲みながら休憩する。

今日は天気がいい。

空は青く、湖上を渡る風はおだやか。

夜は何を飲もうかなーと考えながら、ぼんやりと細波立つ琵琶湖

を眺めていると、突然びくつと体が震えた。

本能が嗅ぎつけた強烈な脅威の接近に、思考が停止しかける。

ほとんど同時に鮫島少尉が動きを止め、実を詰め込んだ袋を掴んで私のところへ来ながら言った。

「退避を」

「間に合わない。防御壁張るから、動かず静かに」

鮫島少尉が答える間もなく、数十メートル先で湖面がぐぐつと持ちあがり、巨大な生きものが大量の水をまとうて出現した。

私は呪文の詠唱なしで自分と鮫島少尉を覆う七重の防御壁を張ったが、その生きものがまとう水が滝のように降ってくると、あっさりと三枚の防御壁が破壊された。

そんなバカなと思うが、落ちてくるのはただの水ではないようだ。出現した生きもののまとう魔力を含んで攻撃魔法のようになった、水という形の“槍”が防御壁に降りそそぐ。

残る四枚の防御壁を維持するのに必死になったが、メリメリと嫌な音を立ててヒビが入り、時間が経過するにつれて耐えきれず壊れていく。

右肩の珠の中で主の窮地を察したシガーが吠えたが、水相手に炎属性の魔法生物が出てきても何ともならない。

君はそこにいなさい、と強く命令して珠の中に押しとどめた。

そうしている間にも防御壁は残り二枚になり、またバキンと耳障りな音をたてて破壊され、残り一枚となる。

水煙で周囲は何も見えず、落ちてくる水の勢いがゆるむこともない。

ヒビ割れていく最後の一枚の防御壁の中で、思った。

あー……

これはちょっと、無理かも。

第九話「約束の隼石」

「ごめん、鮫島少尉。もうダメかも」

残り一枚の防御壁をかるうじて維持しながら言つと、重低音の声に叱りとばされた。

「諦めるな！ 集中しろ！」

うおっ。

今の声、頭にびりびりきたよ。

でもさ、最後一枚の防御壁もメリメリ言つてもう今にも壊れそうで、無理なもんは無理なんだよ……、あれ？

滝のように落ちてきていた水が、何の前触れもなくふつと止んだ。

ヒビの入った最後の一枚の防御壁の中から、もうもうと立ちこめる水煙がおさまり、その向こうに巨大な蛇に似た生きものが現れるのを声もなく見つめる。

頭には牡鹿のような立派な角を持ち、つややかな青の鱗で覆われた長い体に、五本爪の脚がある。

しかし、神々しいまでの威厳をそなえて優美な巨躯に反して、ぎよろりとした目は余裕なく血走り、ひと睨みされただけで心臓が止まりそうな物騒な圧迫感に、息が止まった。

たぶんこれが深い水底に棲むという、ヌシ。

龍。

……て、わかっててもどうしようもないな。

これは死んだか。

ぱくつと食われて、ごはんになって終わるのか。

指一本動かせずに呆然としてみると、頭の中に声が響いてきた。

《 人よ、何を騒ぐ？ 》

恐ろしげな姿とは違い、思慮深い老人のような声に驚いた。集中が途切れ、ヒビ割れた最後の一枚の防御壁が消える。

ギャップがすごいんですが、本性はどちらですかと訊きたいのを我慢して、その問いかけに答えた。

きつと、話をしている間はぱっくり食べたりしないはず。

「私達は必要なものを取りに來ただけです。用件は終わりましたので、もう帰ります。お騒がせして、申し訳ありませんでした」

《 我を起こしておいて、それで済むと思っておるのか？ 》

「お言葉ながら、又シどの。あなたは眠っていたようには見えません。目が真っ赤で、お疲れのご様子です」

《 そうじゃ、そうじゃ。我は眠れぬ。だが動くこともできぬ。ゆえに腹が減っておる 》

ぎらぎらと物騒に底光りする巨大な目が、私と鯨島少尉をとらえて動かない。

冷や汗が浮かび、上ずりそうになる声をせいっぱい落ちつけて、言った。

「又シどの、どうかお聞きください。

私達のような小さなものを食べても、さほど腹の足しにはならないでしょう。それよりも眠れず、動くこともできないというその理由を、教えてはいただけませんか。何か私達にできることがあるのなら、喜んでいたします」

永遠にも思える長い沈黙の後、老人の声が頭の中に響いた。

《……よかろう》

そして、大きな波を立てながらその巨体を低くかがめる。

《 我の首に、トゲが刺さっておる。それが痛うて痛うて、眠ることも動くこともできぬのだ。人よ、そなたに我に触れる許しを与えよう。さあ、このトゲを抜いてくれ 》

青龍はなぜか鮫島少尉が動くことを許さなかったので、私一人で浅瀬の中に入ってトゲ抜きに行くことになった。

もしトゲの近くにある逆さに生えた鱗に触れたら、我はたちまち怒り狂って大暴れするだろう、と脅かされたので、かなり慎重に鱗の向きを確認しながらトゲを探し、しばらくかかってようやく見つけた。

「ありました。鱗と鱗の間に、私の腕くらいのトゲが刺さっているようです。これから抜きますので、どうか動かないでください」

無言で動きを止めた青龍の様子を見ながら自分の体に強化魔法をかけ、つややかな鱗と鱗の間にはさまった木の枝を掴むと、一息で

引き抜く。

抜く時の痛みで暴れられたらあっさり潰されるな、と思ったが、幸いなかなか我慢強い龍だったらしく、私がお願いした通り動かずに耐えてくれた。

ほっとして一気に力が抜けそうになる体をかろうじて保ち、痛々しい傷口が化膿したりしないよう治癒魔法をかけて、木の枝を片手によろよろと水からあがる。

青龍に動くことを許されなかった鮫島少尉が、手をのばして倒れそうな体を支えてくれた。

もうほとんど気力が残っていなかったので、遠慮なく彼にもたれかかりながら、目を閉じた青龍に木の枝をにかけて見せる。

「又シどの、これがトゲです。無事に抜けました」

青龍はゆっくりまぶたを開くと、血走った目はそのままだったものの、先よりだいぶ穏やかな表情で答えた。

《 おお。おお。なんと小さなトゲよ。そのように小さくあるものが、なぜ我にこれほどの苦痛を与えられたというのか。

…… まあいい。人の子よ、礼を言う。何か望むものがあるなら、申してみよ。我がそなたの願いを叶えよう 》

生きて帰ればじゅうぶんだ。

下手に願い事なんて考えて言ったら、欲張りすぎて墓穴掘りそう

だし。

「お役に立てたならこれ以上のことはありません。そもそも私達が騒いだために又シドのをわずらわせてしまったのですから、どうぞお気になさらないでください」

《 そのようなわけにはゆかぬ 》

青龍はあつさり言つて、ほろりと右の目から青い涙を流した。
その涙は美しく青い雫石となり、琵琶湖の浅瀬の透明な水底へ沈んでいく。

龍の涙、雫石！

めつたにお目にかかれない、とてつもなく稀少な素材だと気づいて心臓が高鳴った。
あれを使つたら何が作れるだろう？ とか、売つたら葡萄酒のボトルが何十年分買えるだろう？ とか、低俗な思考が一瞬にして脳裏を駆けめぐる。

青龍はそれを見越したように言った。

《 人よ。この石を持ち帰り、願いが決まつたなら戻り来て湖へ投げ入れよ。我はただ一度そなたに応え、その望みに耳を傾けよう。だが湖に投げ入れるためでなくこの石を手放した時、そなたの身

には永劫に消えぬ呪いがかかると心せよ 》

……は？

さらりと告げられたことをすぐには理解できないでいる私を置き去りに、また会う日を楽しみにしているぞと言って、青龍は湖底へ帰っていった。

しーん、と静まりかえった琵琶湖のほとり。

私はくたくたとその場に座りこんで、鮫島少尉に聞いた。

「もしかして私、今、呪いをかけられたの？」

沈黙の中、水底で青い雫石がきらきらと輝いていた。

第十話「魔物の活性化期」

半分放心状態で【大和】へ帰って起こったことを報告すると、みんな半信半疑で、青い隕石を見せてもあまり信じてもらえなかった。

「龍を助けて隕石をいただくとは、まるで御伽話のようですね」

高原中将にまでなまあたかい眼差しでそう言われ、自分でも「どこの日本昔話だよ」とか思ったけど、実際に言うことないだろうとひっそりうなだれた。

しかしそのまま放置されるわけではなく、魔道具開発部から魔物の素材の価値を判断するのに長けた鑑定士が呼ばれ、青い隕石が本当に龍の涙なのかどうか確認された。

当たり前だが「本物です」と言われ、訊かれた。

「どうすれば譲っていただけますか？」

鑑定士は青い隕石を握ったままなかなか返さず、ひたすらに「いくらでも出すから売ってくれ」とか「あなたの必要とするものをすべて最優先で作りますから譲ってください」と頼みこんできた。

いや、それ手放したら私、呪われるんだよ。

龍が呪うなんて初めて聞いたけど、彼らについての情報は少ない

から、呪うことができない、という確証もない。

「売りませんし譲りませんし、盗られたら取り返しに行きますんで返してください」

呪われたくない一心で即答した私を見て、高原中將は鑑定士に青い隕石を返させ、「このことは他言無用ですよ」と言いふくめて部屋から出した。

沈黙のおりた部屋で、水底の生きものに思わぬ厄介事を背負わされた魔女と長命種の統括者は、顔を合わせて「内密に」と頷き合う。

そうして「青龍に再会するためでなく手放すと呪われる」という隕石は、龍への「墓穴を掘らない願いごと」を考えつくまで、首飾りに加工されて私の服の下へしまいこまれることとなった。

× × ×

予想外の事態に出くわしながらもなんとか生きのび、東方連合軍に入って翌年の春。

椿が話していた予測が現実のものとなり、魔物たちの活性化期が始まった。

数十年に一度巡ってくるという魔物の活性化期とは、文字通り魔

物が力を増して暴れまわる時期で、期間は約一年。

今のところそれぞれの都市にこもって時が過ぎるのを待つ以外、対処法は無い。

長命種^{メトセラ}の中でも比較的戦闘に向いていた私は「通路門^{ゲート}」の運用任務から完全に外され、攻撃をしかけてくる魔物に対抗するための、戦闘任務専門の人員となった。

任務の一つ一つはとくに難しいものではなかったが、数が多くなってくるとだんだん疲れて、間違いをおかしやすくなる。

私も幾度か判断ミスをおかし、そのたびに楯となってくれたシガ―は炎の体を切り裂かれたり噛みつかれたりして紅珠の中へ休みに戻り、護衛官も三人負傷して他のものと交代した。

自分のミスによって自分が被害を受けるならまだしも、必ず自分以外のものに被害がいく現状は納得しがたい。

けれどシガ―には楯が「楯となれ」と最優先命令を出していて変更できないし、【大和】の軍内でもそれなりに役立つ戦力である私につけられた護衛官たちは、忠実にその任務を遂行する。

そして、悪いのは彼らではない。

早朝の任務でまた護衛官が負傷した。

お酒を飲む気にもなれずに待機室の長イスで寝転がっていたら、

何度一緒に出撃しても軽傷が無傷で生き残る護衛官、鮫島少尉に言われた。

「彼らが負傷するのは自分の力不足とあなたの判断ミスのためです、讓葉少佐」

無言で目を閉じていると、彼は重低音の声で続ける。

「あなたは自分の判断力の甘さを自覚して対策を講じ、精神的な疲労を蓄積させないようにすれば良いだけです。負傷した彼らの力不足まで、自分の責任であると思う必要はない」

その声の中の何かが、こわばっていた体から力を抜かせた。

ふと息をつき、久しぶりに憂鬱でなくまぶたを開いて、すぐそばで片膝をついている鮫島少尉の顔を見る。

角ばった無骨な顔立ちをした、眼光鋭く頑丈な男だ。感情をまったく見せない鉄面皮で、無愛想。

でも、優しいところもあるのだと、今の私は知っている。

「鮫島少尉」

寝転がったまま呼んで、言った。

「君が言う通り私は判断が甘く、自己管理についても未熟だと思う。でも君は、そんな魔女のそばで重傷を負わず護衛官を続けられるほど優秀。こんなところで浪費するのはもったいない人材だと思うん

「ただ、もっと良いところへ転属したいと望む意思はある？」

その意思があるなら、高原中將に私の推薦付きで伝えておくよ、と言うと。

普段、まったく感情というものを読み取らせない鉄面皮が、珍しく驚いた様子で目を見開いた。

「……前々から思ってはいましたが、あなたは本当に変わった魔女ですね。長命種は自分の興味対象以外は目に映さず、人間関係に無頓着なのが普通。「ありがとう」「や「すみません」という言葉など、知らないのが当然だというのに」

「私は山奥で自分勝手に暮らしていた魔女だよ。他の長命種なんて、姉の椿しか知らない。それより先の質問の答えは？」

彼が答えを返す前に、バンツと勢いよくドアを開けた伝令兵が「緊急出撃要請！」と叫んだ。

私は反射的に飛び起きて廊下に出ると、伝令兵が【大和】の外壁を食い破りかけている大型の魔物について話すのを、足早に歩きながら聞く。

鮫島少尉はその一歩後ろに続き、私たちはそのまま魔物退治に赴いた。

x
x
x

魔物の活性化期はなかなか終わらず、軍の中には疲労感がたまつて死傷者が増えていった。

聞けば現在、世界中が同じような状況になっているそうで、いくつか壊滅的な被害を受けた地下街もあるという。

幸い日本列島にある三ヶ所の核都市と四十四ヶ所の地下街はなんとか持ちこたえており、私もたまに救援要請を受けて近隣の地下街へ行くと、住人たちの脅威となっている魔物を排除した。

そうした忙しい日々の中で、私は一人の魔法使いと知り合った。

「あんた今ヒマだろ。ちょっと俺の代わりに戦闘任務行ってきたくれよ」

待機室で短い休息をとっている時、突然そう言われたのが始まりだった。

青地に白を入れた服を着て、長命種に特徴的なアクセサリをいくつつけた青年が目の前にいる。

このひと誰？ と寝ぼけた頭で見あげていると、そばにいた鮫島少尉が「青桐^{あおぎり}少佐です」と教えてくれた。

彼は普通の人が思い描く通りの典型的な長命種だそうで、興味の対象以外を目に映さず、人間関係に気を使わず、自分を中心に考えることを当たり前としているわかりやすい人だった。

「私が判断できることじゃない。高原中將を通してくれ、青桐少佐」

「あの石頭が俺の言うこと聞くわけねえだろ。でもとにかく今は時間が要るんだよ。ブツ切りじゃなくまとまった時間が！」

「だからヒマそうなお前が俺の代わりに行ってくれよ」と言う青桐少佐の護衛官は、数歩後ろで沈黙しており、何もしようとしない。面倒だなとため息をつき、理由を訊いた。

「なんでまとまった時間が必要なの？」

「んなもん考えてるからに決まってるだろ！今の都市結界はヘンに複雑にしてあるくせに脆いんだよ。だからしょっちゅう壊されかけて俺達呼び出される。アホらしくって話にならねえ。」

でももうちつと簡単に頑丈なヤツをかぶせて補強してやりゃ、俺は寝てる時間を叩き起こされずに済む」

清々しいほど「俺」基準だが、もし本当に結界を頑丈なものにできるというなら、誰にとってもありがたい話だ。

具体的にどう補強するか案はあるのかと訊くと、意外なほどしっかりとした考えがあるのを得意げに披露してくれたので、彼を連れて高原中将のところへ行った。

高原中将は長命種の統括者だが、当然ながら魔法については専門家たる長命種ほど詳しく知らない。

すばらしく「俺」基準で、「自分が知っていることは相手も知っている」という前提で話を進めていく青桐少佐の言葉が意味不明にならないよう、所々フォローを入れながら、彼の話が終わると私は高原中将に「どうでしょう？」と訊ねた。

「彼の言う案が本当に実現可能なものなら、現在の結界を構築する

魔法陣を変更せず、上塗りで補強できます。良い考えだと思つのですが」

「ふむ。確かに、それならばさして負担なく防衛力を強化できますね」

「だから最初からそう言ってるだろ！ お前らバカばっか！」と不機嫌にさわぐ青桐少佐を気にする人間など、この部屋にはいない。高原中將は青桐少佐に下した任務を私に遂行するよう命じ、ふてくされた子どものような顔をした彼には結界の補強案を完璧なものにするよう命じた。

「はじめからそう言やいいんだよ」

青桐少佐は自分の考えが通ったことに気づくと、上機嫌で部屋を出ていった。

やれやれとそれを見送り、失礼しますと私も部屋を出ていこうとすると、高原中將に呼びとめられた。

「讓葉少佐、彼を連れてきてくれたこと、感謝します。彼はあなたをずいぶん気に入っているようですし、あなたは魔法について凡人に説明するのがたいへんお上手だ。青桐少佐が補強案を完成させた際には、またご同席を願いますよ」

もし私が魔法についての説明が上手だとしたら、しばらくの間「凡人（私）にわかりやすく説明する魔女（椿）」に色々教えてもらっていたからだろう。

ただそれだけのことなのに、またあの子どもに付き合わなければならぬのか。

戦闘任務とはまた別の意味で疲れそうな仕事だったが、まあ、連

れてきたの私だしな。

しょうがないかと諦めて「了解」と答え、部屋を出た。

第十一話「讓葉少佐の取扱注意点」

真夏に始まった「都市結界の補強案」の試行錯誤は、冬に入る前に完了した。

青桐少佐は無事に【大和】の結界を補強し、その功績を認められて中佐に昇格した。

「これでお前より俺の方が偉くなったな。まあ実力で考えれば当然のことだが。でもお前には少しだけ世話になったから、俺をなづめと呼ぶ許可を出してやる」

満足げにふんぞり返る青桐中佐を「はいはい、そりゃーありがとう」と適当に流して小ビンの葡萄酒^{ワイン}を飲み、それが空になったのに気づいてイスから立ち上がる。

「どこ行くんだ？」

「お酒の補充」

待機室を出ると現在の護衛官の一人である九条中尉と一緒に、なぜだか青桐中佐と彼の護衛官までついてきた。

「そういえばお前、勤務中に酒飲んでてなんで注意されねえの？」

「高原中将の名前で私の飲酒の許可が出てるから」

本当はもっと上の方の人の口ききで高原中将が一筆書いたのだが、表向きはそうなっている。

ちなみに上の方の人にそうするよう言ってくれたのは、椿の使い魔の漣だ。

軍の施設内を猫の姿で歩いていると蹴飛ばされそうになる、と言つて、最近は銀の指輪についた透明な珠に入っていることが多い（珠の中にも周りの様子はわかるので、情報収集には問題ないらしい）が、漣には色んな面でもお世話になっているなど、ふと気づいた。

今度、漣の好きなものを用意して、一緒にお酒でも飲むか。

「なんで高原中將がお前の飲酒許可なんて出すんだ？」

隣から聞こえてくる声に、まだいたのか、とため息をつく。

青桐中佐はその後「なんでなんで？」と訊きながらついてきて、九条中尉に「なつかれましたね」と言われた。

いや、あんまり嬉しくないんだけど。

そんな会話をしたせいか、青桐中佐は夜に部屋へ突撃してきて「遊びに行くぞ！」と言い、面倒くさいとしぶる私を裏通りへ引っばつて行くようになった。

飲みながらしばらく「魔道具の改良を思いついたんだが、コレどうよ？」という話を聞いて、酔っぱらった彼が意味不明なことを喋りはじめると、「そろそろ帰るよ」と宿舎へ連れていくこと数回。小柄な体に強化魔法をかけ、青桐中佐の体に軽量化の魔法をかけてから背中に担いで歩く姿が人目を引いたようで、それから周囲が

どうにも騒がしくなった。

魔女にしては面倒見が良いと思われ、単純に興味を持って近づいてくる人や、これは利用できるかもと目論んだ人がすり寄ってきたりしたのだ。

任務についている時は鮫島少尉か、見た目細いのに「柔よく剛を制す」を体現して生き残っている九条中尉が適当に受け流してくれ、それ以外の時には青桐中佐が「なんだデメエ。露草は今俺と話してんだよ」と追いついてくれたので、さして気にはならなかったが。

それをきっかけに軍内にいる女性兵士の何人かと顔見知りになり、彼女たちから気軽に声をかけてもらえるようになったのは嬉しい出来事だった。

この世界の徴兵制度は男女関わりなく義務として都市の住人に課されているので、女性兵士もたくさんいるのだが、適性の問題で戦闘任務に当たるのはやはり男性が多い。

だから普段私がお会いする軍人はほぼ男性で、筋肉美を追求しているかのような彼らはいいかげん見飽きていて、やわらかな曲線美の女性兵士たちを見ると心がなごむのだ。

しかも青桐中佐は女性が苦手らしく、女性兵士たちと話していると近寄ってこないからちょうどいい。と、思っていたのだが。

ある時それを一人の女性兵士にからかわれると、彼は不機嫌そうな顔で言った。

「女ってすぐ意味わかんねえことキーキーわめくし、面倒くせえんだよ」

ん？ と何か引つかかるものを感じ、私は首を傾げて訊いた。

「私も女だよ？」

すると小柄な体の一部を見て「うん」と頷き、青桐中佐が答えた。

「露草はいいんだ。お前は俺の中で女の部類に入ってねえから」

私が速攻で彼を蹴倒して踏んずけたのは当然のことだろう。

「椿に謝れ」

真顔で言っと、椿というのが誰かも知らない青桐中佐は、珍しく素直に従った。

「う、ごめん？」

疑問形だったのが気に入らなかったが、とりあえず謝ったので足はどけた。

× × ×

青桐中佐が発案した結界補強は【大和】で効果を上げ、他の核都市や地下街でも採用された。

なかなか魔物の活性化期が終わらず疲労がたまっていたが、いくらか堅固になった結界のおかげで休息がとれるようになり、多少楽になった。

森の凍てつく真冬にも元気に外を闊歩する魔物の退治に奔走し、年が過ぎる。

そして兵役二年目の春頃に、活性化期はようやく終わった。

しかし、息をつく間もなく情報が入る。

「来週から『プロジェクト・ユグドラシル世界樹計画』が第二段階に入ることが、正式に決定されました」

将校用の食堂に長命種たちを集めた高原中將が、南国の鳥かと言いたくなるほど好き勝手な格好をしたカラフルな集団へ言った。

「詳細は今配布した紙に書かれている通りです。担当者となる適性あり、と判断された方には後で招集がかかりますから、承知しておいてください。以上です」

配られた書類を持ってばらばらと部屋を出ていく長命種たちの中で、私はひとりイスに座ってそれを読んだ。

数枚の書類に書かれているのは『魔導院』主導による『世界樹計

画』の簡単な説明で、要点は五つ。

一つ。

「『世界樹計画』とは、世界中の砂漠を植物によって緑化し、魔物の弱体化を狙う計画である」

二つ。

「世界中の砂漠へ根を下ろす植物は、第二の危険種とならないよう、ひとつの中枢意思によって統べられる」

三つ。

「第一段階でそれらの植物の根源となる“世界樹の根”が無事育成されたため、第二段階ではその根から造られた中枢候補、“世界樹の若枝”が世界各地の核都市へ配布される」

四つ。

「配布された若枝はそれぞれの都市で一定期間、担当の長命種によって育成され、期間終了後、試験によって選ばれた一体のみが中枢となる」

五つ。

「選抜試験に落ちた若枝は、問題無ければ育成された都市の近隣にある砂漠に植えられ、世界樹の一部となる」

椿が初期段階に関わり、私がこの世界へ転生する原因となった計画が、いよいよ身近に来るようだ。

【大和】では誰が担当者になるのかなと考えていると、いつの間にか隣に座っていた青桐中佐が訊いてきた。

「なあ、露草。お前コレ、成功すると思うか？」

「さあ。どうだろうね」

「俺はやベエと思うけどな。そもそも危険種の植物造ったヤツと同じ思考だぞ。植物で砂漠を緑化して魔物を抑える、つての。」

これには書いてねえが、普通の植物じゃ魔物に食われたり踏み倒されたりして枯れるだけだろうから、何かの特殊能力を付加してあるんだろうし。

第二の危険種にならないように一つ一対策も、理屈はわかるけどな。結局その中枢の制御に失敗して、また状況悪化させるだけで終わるんじゃないかね？」

「だからその植物を統括して管理する中枢を、複数育てるんでしょ。最終的に世界樹になるのは一体のみで、複数体用意された“若枝”は、世界各地の核都市で適性のある長命種が一体ずつ預かって育成する。どこかの都市の誰かが上手く育ててくれたら、成功するかもしれないよ」

「それがやベエじゃねえか。長命種が育てるんだろ？俺みたいなのが育てた若枝が、うまいこと世界中の植物を統括して砂漠潰せるところか？」

意外と自分のことを把握しているんだなと、ちょっと感心した。

「そうだね。無理かも」

「即答かよ。そこは「そんなことないだろう」「とかお世辞でも言つとけよ」

「やだよ、面倒くさい」

「……言つとくけど、お前が育てても失敗すると思つぞ?」

私はうんと頷いて答えた。

「どっかの誰かが成功させてくれるといいねー」

第十二話「世界樹の若枝」

幸か不幸か、『世界樹計画』の第二段階の適正者として、【大和】では私が選ばれた。

近い将来、世界中の砂漠に根を張ってそこに棲む魔物を抑え込むことを期待される“世界樹”の中枢候補、“世界樹の若枝”のうちの一体を育成せよ、と正式に命令が下る。
期間は二年だ。

椿の望みを叶えるにはちょうど良い立場だから歓迎すべきことなのだろうが、私が育てたものが世界中に根を張る植物の中枢になれるとは思えなかったため、その点は「残念です」としか言いようがない。

そして細い糸のような雨が若葉をすべる、初夏の頃。
世界樹の若枝が【大和】へ運ばれてきた。

それはつややかな新緑の色をした髪と濃いエメラルドの瞳を持ち、西洋風の愛らしい顔立ちをした両性具有体の子どもの姿をしていた。幼いためかまだ言葉は喋れず、人見知りする性格なのか注目されると物影に隠れようとする癖のある、もの静かな子だった。

私は“世界樹の若枝”がなぜ人の姿をしているのか、どんな能力を持っているのか等の情報をまったく与えられず、ただ「定められた期間、この子を育成するように」と言われるのに、『魔導院』の秘密主義の一端を垣間見た。

さすが、「秘密主義者の巣窟」とか「手続きや様子見に時間をかけるばかりで仕事が遅い」とか、「態度も性格も悪い」とか、いろいろと悪評の多い世界的機関だ。

平然と自分達の思考を押し付け、それに対する抗議は「検討しておきます」の一言で流すのに慣れている。

ともかく私は【大和】での担当者として、人の形をした“世界樹の若枝”を引き取って育てることになったのだが、その子はなぜか私にはすぐなついた。

他の都市では担当者になつかず苦心したという話を聞いていたので、不思議に思っていると、漣が当たり前のように言った。

「椿が「私は必要な魂を呼んで、それにぴたりと当てはまる君が降りてきた」って言ってたでしょ。世界樹の若枝がなつきそうな魂っていう条件も入れてたんじゃないの」

あー、なるほど。

しかし、本当に私でいいのだろうか……

やや不安に思うが、命じられた以上はやるしかないのが現状だ。

名前が無いのは不便なので、その子に「皐月^{あきづき}」という仮名を付け、私の荷物を宿舎から城砦に与えられた部屋へ移すと、一緒に生活し始めた。

戦闘任務から外され、数日に一回「通路門」^{ゲート}の運用任務に当たるだけ、という生活はとても楽だった。

そして私はさらなる楽をするた……、じゃない、人見知りする皐月に社交性をつけるため、特徴的な髪と瞳の色を魔法で無難なものに変え、城砦の外へ連れ出した。

「ほーれ、遊んでおいでー」

にぎやかな表通りの端で走り回って遊ぶ子どもたちの中に放り込み、自分は木陰に座ってひらひら手をふる。

どうすればよいのかわからない様子でおろおろしていた皐月は、私が「ちよつと遊んでやって」と頼んだ女の子に手を引かれ、おずおずと鬼ごっこの中に入った。

たまたま目をつけたその女の子は面倒見の良いタイプで、最初は皐月と手をつないで一緒に逃げたり鬼をやったりしてから、ちよつと慣れたところで手を離れた。

しかし皐月はまだ心細かったらしく、一人で鬼になってしまうと途方に暮れた様子でうろろし始めたので、今日はこれで十分かと思っ
て迎えに行った。

「よく遊べたねー。いい子、いい子」

自分の体へ強化魔法をかけてひょいと抱きあげ、途方に暮れた顔をよしよしと撫でて褒めまくる。

鬼ごっここの鬼を連れて行こうとする私を見て子どもたちが集まっ

てきたので、「おやつに食べて」と乾燥果実の詰まった袋を先ほどの女の子に渡した。ドライフルーツ

「それじゃ、また明日ねー」

「うん。またあしたー!」

臨時収入ならぬ臨時おやつにありついた子どもたちは喜んで、笑顔で手を振ってくれた。

私は「またねって手を振るんだよ」と教え、意味がわかっているのかいないのか、ともかく一度手を振った皐月を「おー、すごいすごい」と褒めたたえながら城砦へ帰った。

魔物の活性化期が終わり、その間に受けた外壁の損傷の復旧作業が始まっている時期だからか、ただ夏だからか。

都市は明るく、子どもはにぎやかだ。

そして毎日表通りで遊んでいると、皐月は私の名前よりも先に、一番よく面倒を見てくれる女の子の名前を覚えた。

「さや、さーや」

「なあに？ さつきちゃん」

今も沙耶さやというその子と手をつないで、都市の中を流れる小川を泳ぐちいさな魚を指差している。

沙耶は他の子が遊んでいるのに加わらず、皐月の指差すものが何と言っのか答えて、言葉を教えてやってくれた。

「あれはさかなって言うの。さかなよ。さ、か、なー」

「さ、あ、あー」

「そうそう。最初はあってる。さ、か、なー」

「さ、あ、あー」

私は木陰でのんびり寝転がり、そのなごやかな風景を眺めている。背後に無言で立っている鮫島少尉については、何度「座ったら」と言っても「いいえ」と断るので、もう放置だ。

表通りに軒を連ねる店の人々や、皐月と遊んでくれる子どもたちの親は、護衛官の存在や何やらで、私が軍属の魔女で皐月が「普通の子」とは違う「ことを察しているようだったが、とくに何も言わず受け入れてくれていた。

というか、時々「肴にどうぞ」と煮物や漬物などをくれたりして、なんだか歓迎な感じで不思議だ。

長命種が集められてたくさんいる軍では冷たい視線で見られているのに、城砦の外へ出るとあたたかく迎えられるって、いったい何なんだろう？

理由がわからず首を傾げていると、子ども連れの魔女なんて珍しいし、子どもたちがお菓子をもらってなついている人だから、お返しに肴をくれているのでしょうかと九条中尉が言った。

何も問題ないならいいんだけど。

そういえば、見た目が優男な彼はご近所の奥さん達に人気で、

ちょっと男手が要るんだけど借りてもいいかい？」とたまに声をかけられる。

私は「どうぞどうぞ」と本人の意見など聞きもせず貸し出し、後で「ありがとうねえ、助かったわ」と言いながら差し出される肴を、「いえいえ」と答えながら受け取っておいしくいただいた。

鮫島少尉は顔が多少いかついせいかが眼光が鋭いせいかが、ケンカ騒動が起きたりした時に「あんたちよつと、軍人さん！ さつさとして止めてちょうだいな！」と駆り出されるくらいで、引っぱって行かれることはなかった。

今日の肴は小間物屋の奥さんがくれたキュウリの漬物。
そしてお酒はにぎり酒。

どっちもおいしいなーと堪能しているのを青桐中佐に見つかりすると、「お前なんも世話してねえな」と呆れられるのだが、ちゃんと見守ってるんだからいいだろうと思う。

皐月は赤ん坊ではなく自分で食べて動ける子どもの姿で来たのだから、一から十まで手とり足とり世話してやる必要はない。

「くー！」

小川のそばで何を思ったのか顔をあげた皐月が、唐突に私を指差して叫んだ。

くー？　く？　なに？

意味がわからず首を傾げていると、隣にいた沙耶が頷いた。

「そうそう。つゆくさん。くーさんね」

くーさんか。

なんかどこぞのクマさんの親戚みたいだな。

まあいいけど。

呼ばれたらしいので「ほーい」とひらひら手を振ると、皐月はぱたぱたと走ってきて私の上に飛び乗った。

ぐはっ、と大げさにうめいて痛がるふりをする、びっくりして起きあがり、おろおろしながら「くー？　くー？」と心配してくれる。

その様子を見て何ともないよと笑うと、皐月はちいさな頬をぶくつとふくらませて怒った。

「ごめんごめん、ちょっと遊んだだけだよ」

「くー、やー！」

「えー？　やって言われると傷つくなー」

「んー！」

悲しげな顔をすれば、ふるふると困ったように首を横に振る。

可愛い子どもにしか見えないのに、これが魔法で造りだされた生きものだというのが、この世界の技術はおそろしい。

私から離れてまた沙耶と手をつなぎ、どこかへ走っていく皐月の背を見ながらふと、誰にともなく祈った。

願わくば、どうか最悪の結果にはなりませんように。

第十三話「青桐中佐の出立前夜」

前世で、学校を卒業して働くようになって、私にとって季節はいつの間にかただの「気温の変化」になっていた。

夏が来ると半袖の服を出して、冬が来ると長袖の服とコートを出して、あとはスーパ―でその時期の特売品を買う程度。

だからその延長で、この世界に来ても季節などそれほど意識したことはなかったのに、皐月と生活をともしはじめると、気温の変化以上のものを感じるようになった。

水場で遊んで日焼けして、地下水で冷やした野菜をかじり、遊び疲れると木陰で昼寝する夏。

皐月は水を両手にすくって私のところへ来ると、持ってきたはずの水がすべて指の間からこぼれ落ちて無くなっているのに、なんで？ と不思議そうな顔をする。

紅く色づいた木の葉を持って駆けまわり、木の実を見つけではしやぎ、今年の収穫を感謝する小さな祭りに目を輝かせる秋。

皐月はきれいな木の葉やびかびか光る草の実、面白い形をした石を拾うと私のところへ持ってきて、満面の笑みとともに「どーぞ」と差し出す。

霜が降りた土の上をしゃくしゃくと踏んで歩き、水溜りの上が凍

てついてできた氷を割って遊び、降る雪が手のひらの上でとけるのをきょとんと見おろす冬。

皐月はぱたぱたとあちこちを走り回っては、時々「しゃむいー」と言って私のコートの中にもぐりこんでくる。

毎日が不思議なほどにぎやかでまぶしくて、皐月の目を通して私も一緒に世界を初めて発見しているような、新鮮な気分だった。

その間にも『世界樹計画』を企画、進行している『魔導院』の人たちが様子を見に来たり、『エイリー教』の過激派が“世界樹の若枝”の破壊を狙って各地で騒動を起こしたり、【大和】でも『世界樹計画』に不信感を持つ人々が論争を巻き起こして乱闘騒ぎになったりと、色々なことがあったが。

皐月にはできるだけそういうことは知らせないようにして、子どもたちと遊ばせた。

私は皐月の遊び仲間の子どもたちやその親、表通りの人々とすっかり顔なじみになり、皐月が「くー」と呼ぶので「くーさん」と呼ばれるようになった。

沙耶が一度、「お母さんか、お姉さんじゃないの？」と訊くと、皐月が首を横に振ってこう答えたからだ。

「おかあさん、とおく。いま、おねんね」

私はその言葉と、城砦に帰った後でいくつか質問をした時の答えで、皐月が“世界樹の根”を「おかあさん」と認識し、何らかの手段でその位置と状況を把握することができるようだ、と理解した。

そして沙耶と表通りの人々は、「皐月の母は亡くなったのだらう」と理解した。

こんなご時世だから、親を亡くした子どもなど珍しくもない。

以降、誰も皐月の親については訊ねなくなり、私は「ちよつと、くーさん！」と呼ばれて、もめ事の処理や小火^{ホヤ}の鎮火に駆り出されるようになった。

皐月は最初、私の姿が見えなくなると落ち着かない様子で探していたようだが、一時的になつてもすぐに戻ると理解すると、鮫島少尉が九条中尉を残して「出かけてくるよ」と言う私を、「いつてらっしゃー」と笑顔で見送れるようになった。

そして私が戻ると一番に見つけ、ばたばたと走って来ながら「おかえりー！」と言うのだ。

世界中の砂漠に根を張って魔物を抑え込むために造られたという植物の中樞候補が、なぜこれほど可愛らしいのか。

私にはさっぱりわからなかったが、ともかく皐月が「楽しい」と思えることが一つでも多く起きればいい、という意識で世話していた。

「何かできるようになつたかね？」

ある時、東方連合軍の【大和】支部を預かる上層部の将官達がぞろぞろと食堂に来て「何かしてみせろ」と言うのに、皐月は最近遊び仲間の子どもたちと一緒によくうたう歌を披露した。

春が来たら花が咲いた、という簡単な歌だ。

皐月が歌詞を一度も間違えることなく歌い終えると、それだけか？ と不満げな将官達の前で、「おおー、うまいうまい」と私一人が拍手した。

他の核都市の長命種たちは、世界樹の若枝がそなえた特殊能力を開花させようと色々やって、どこかの都市の若枝は“植物の生育速度を制御する”とかい^{「コントロール」}うのができるようになったらしいが、私は興味がなかった。

私以外の【大和】の長命種たちも、青桐中佐の言葉を借りるなら「俺の研究じゃねえからどうでもいいや。あ、でも、ひと通り実験が済んで結果がまとまったらソレ見るかも」という無関心っぷり。

なので皐月の育成方針について、一部の人々から「我々の都市で育てた若枝を世界樹の中枢に！」と時々ごちゃごちゃ言われる程度で、あまり干渉されずに済んだ。

私の育てた若枝が、世界樹の中枢になんてなれるわけないだろう。皐月はそんなこと気にせず、楽しめるだけ楽しんで、育ちたいだけ育って、今ある一時をすごせばいい。

×
×
×

兵役三年目の秋。

皐月が来て一年が過ぎた頃、青桐中佐が『魔導院』にスカウトされて、【大和】を離れることになった。

都市結界の補強を行った功績や、様々な魔道具の改良に才能を発揮したのが、誰かの目にとまったらしい。

出立前夜、青桐中佐は両手に酒ビンを抱えて私の部屋へ来ると、一杯飲みながら最後まで彼にはなつかなかった皐月に言った。

「いつ見ても可愛げのねえガキだな」

皐月は私の膝の上に座って、不機嫌そうな顔をしている。

「そんなこと言うのは青桐中佐だけだよ。いつも遊んでる子たちにも、近所の奥さん方にも「皐月ちゃん可愛い」って言われてるし」「全員目が悪いんだな。俺にはソレが可愛いとは思えねえ。今だって俺のこと睨んでるんだぞ？」

「それは君が睨んでるからだよ。皐月は鏡みたいなものだから、不機嫌な人の前では不機嫌になる。いつも笑って見せてたら、皐月も笑ってなついたかもしれないのに」「なつかんでいい。ガキは嫌いだ」

自分がガキだからな！。

同類嫌悪か。

言葉にはせず思っていたら、「今なに考えた？」と私まで睨まれた。

「べつに何も。それよりそんな顔してないで、もうちょっと嬉しそ

うにしたら？ 魔法研究の最高機関へ行くんだよ、青桐中佐。誰にでも行けるところじゃない」

「そんなもん、俺の実力なら当たり前のことなんだよ。研究なんざどこにいたってできるしな。それよりお前、俺が素って呼んでいいって言うてんのに、最後まで「青桐中佐」かよ」

「何？ 気にしてるの？」

「俺が？ 気になんて、するわけねえだろ」

素直じゃないくせにわかりやすいな。

「じゃあ、素。今度会ったら『魔導院』がどこにあるのか教えてね」
「ソレ機密情報じゃねえか。俺に漏洩しろってのかよ。なんてヤツだ」

「えー。だって、どこにあるのかわからない長命種の秘密基地って、気になるからさー」

笑みを含んで言うと、青桐中佐がふと真顔になった。

「じゃあ、お前が来いよ」

何を言い出すかと思えば、もう酔っぱらったのか。
今日はまた早いな。

「いや、私には無理だよ。そんな賢くないし、発想力があるわけでもないし」

「そんなもん、どうにかしようと思えばどうにでもなるだろ」

酔っぱらい青年よ、世の中にはどうにもならんこともあるんだ。
体は「ウロボロス円環の蛇」の魔女とかいう椿の複製体コピーだけど、中身が凡才なんだよ。

それくらい察してくれ。

「……どうにかする気はなさそうだな。そうか。そうだよな。露草は俺より鮫島の方が気に入ってるし、皐月もお前の次に鮫島になつてゐる。アイツのいる【大和】を離れる気なんか、ねえよな」

「青桐中佐、今日は絡み酒になつてゐるね。行儀悪いよ」

「俺は元から行儀悪いんだよ。ついでに性格も悪い。だからお前くらいしか一緒に酒飲む相手もいねえってのに、皐月が来てからお前、夜はとつと寝ちまうし」

自分の性格の悪さは自覚済みか。
自覚しててそれなのか。

この先、苦労しそうだな……

「聞いてんのか？ 露草」

「聞いてる聞いてる。夜に子どもを寝かせるには、世話をしてる人が寝ちやうのが一番手っ取り早いんだよ。だから私も早く寝てるの。おかげでスバラシイ健康生活を送ってるよ」

「相変わらず酒びたりだけだな」

「ひたつてるけど溺れてないから大丈夫、……つて。もしかして、一緒にお酒飲めなくて寂しかったから、皐月を嫌つてた？」

青桐中佐は一瞬絶句した後、「そんなワケねえだろ！」と叫んだ。しかし、顔に思いきり答えが出ていたので、その言葉にはまるで説得力がなかった。

なんだろう、君。

最後に自分の残念さを全開するために来たみたいになつてゐるよ。

「おい、露草。お前、顔が笑ってるぞ」

「君と飲むのが楽しいからだよ、棗」

「ウソつけ。お前が好きなのは鮫島だろ」

すぱっと言われたことに即答できず、間が空く。

私は青桐中佐が持ってきたお酒のビンを取って自分の杯につきながら、いつもの口調になるよう気をつけて言った。

「鮫島少尉は私の護衛官。一緒にいるのはそれが任務だから。あんまりしつこいと窓から放り出すよ、青桐中佐」

「窓かよ。ここ十二階だぞ」

「知ってる」

「……本当のこと言われてキレてんのか。それとも自覚してねえところをつつかれて動揺してんのか？」

「何か言った？」

「いや。何も言っただけ。それより一般人でも使える、小型結界装置あるだろ？ あれ、結界の構築式を簡素化すればもっと小型化して軽くできるんじゃないかと思って、ちっと考えてみたんだ。これ見てくれよ、改良版の構築式」

ポケットから紙を取りだしながら、青桐中佐が言う。

明日には所在地不明な魔法研究の最高峰、悪名高い『魔導院』へ行くというのに、呆れるほどいつもと変わらない。

肩から力が抜け、私はかすかに笑いながら「はいはい」と答えて、早く見ると突き出された紙を受け取った。

第十四話「長命種の護衛官」

自覚がなかったから気にせずにいられたのに、自覚させられた。そうしたらもう、気になるのが当然だろう。

「讓葉少佐、そちらは壁です」

ぼー、と考えこみながら歩いていたら、いつの間にか目の前に壁があった。

私の額に手を当てて前進を止めた鮫島少尉が、衝突を防いでくれたようだ。

額に触れた大きくて分厚い手を意識して、頬が勝手に火照るのに、どこかの穴へ埋まりたい気分になった。

「うん。ごめん」

慌てず騒がず一步後退し、鮫島少尉の手から離れて行くべき道を歩きます。

うら若い娘さんじゃあるまいし、何を青春じみたことしてるんだ、自分。

恥ずかしいにもほどがあるぞ。

一時的に心拍数が上がっているのを深呼吸で落ち着かせながら、心の中でつぶやく。

しかし、そんなことをしても何の意味もないのはわかっている。

『魔導院』へ行く前夜、部屋に来てお酒を飲みながら言った青桐中佐の聲が、頭の中から消えてくれない。

「お前が好きなのは鮫島だろ」

軍に入って最初につけられた護衛官で、わりと長い付き合いだからある程度信用しているし、たぶん、いくらかは信頼もしている。彼がいる時の戦闘任務は、他の人がついてくれる時よりなんとなく安心でやりやすいし、重低音の声を聞くと落ち着く。青龍にも一緒に食われかけたし。

……いや、最後のは関係ないか。

ともかく、鮫島少尉に対する私の評価はそういうものだった。一つ一つの断片的な感覚で「彼」という人をとらえていて、そのすべてをひっくりくるめた感情を何と呼ぶのかなど、考えたこともなかった。

でも今、彼に触れられると、顔が火照る。

じつと視線を向けられると、どこかに隠れたいような、そうでないような、もどかしい気分になる。

前世でも今生でも初めての経験で、何をどうすればいいのかわからない。

まあ、何もする必要はないのだが。

そうして頭の中でぐるぐる考えているうちに、今度は階段を踏み外しそうになり、危ういところで襟首を掴んで止められて首が締まった。

苦しかった。

この感情への対処法を早く思いつかないと、予想外のところで死ぬかもしれないな……

×
×
×

一年間の活性化期を終えた後、魔物が静まっていたので、核都市【大和】は活気にあふれていた。

人々は元気に生活し、商売し、もめ事を起こしては「ちょっと軍人さん！」と声をかけてきた。

私は自分の感情に対処するのに内心必死で、何をするにも上の空になりがちだった。

【大和】へ来てから一年と五ヶ月が経ち、ひと通りの言葉を覚えた皐月は、声をかけても反応しない私によく怒った。

「くー！ おへんじ！」

「……え？ あ、うん。ごめん。何だった？」

「もういい！」

我に返って訊くと、怒った皐月は背を向けて、他の子どもたちの方へ走っていく。

しまった、またやってしまった、と反省しながらため息をつくの
に、九条中尉が訊いてきた。

「讓葉少佐、何かあったんですか？ 最近おかしいですよ。特に鮫島少尉と一緒にいる時」

指摘されてぐっとつまり、何と答えるべきか頭の中で右往左往しながら考えていると、九条中尉が言葉を続ける。

「鮫島少尉が何かしましたか？ 問題があるなら早急に対処」
「なにもない」

対処しますが、と彼が言い終わるのを待たずに返答すると、ご近所の奥さん達に人気の優男は「おや？」という顔をして、次にふわりと微笑んだ。

「そういうことでしたか。大丈夫ですよ、讓葉少佐。私が彼を護衛官から外すような報告をすることはありません」

何この全部見透かされてる感。

そして「想定内です」みたいな返事。

「私、そんなわかりやすい……？」

「鮫島少尉は気づいてませんよ。最近、讓葉少佐は体調がすぐれないようだが、原因がわからないし、相談してくれないどころか避けられている気がする、と言って悩んでるだけです」

あー。

護衛官は長命種の健康管理も任務なんだっけ。

悪いことしたな。

「そつえば、讓葉少佐はこれまで一人で暮らしてこられたんだしたね。初めて兵役につく方だと聞いてはいましたが、そうになると護衛官について、あまりご存知ないのは当然のこと。気がきかず、申し訳ありませんでした」

何を謝られているのか意味がわからず、「何の話？」と訊き返すと、九条中尉はあっさり言った。

「長命種の護衛官は伴侶候補なんですよ。ですから魔法使いには戦闘任務に同行する男性の護衛官に加えて、書類と健康管理を主任務とする未婚女性の護衛官がつけられますし、

魔女の護衛官は必ず未婚男性です。それも、とくに“過去に長命種を輩出した血統”が優先して配置されます」

何だそれ。

今初めて聞いたけど、お見合いみたいなの？

というか、血統？

「あ、そうか。長命種が生まれにくくなってるから、その対処法の一つなわけね？ 長命種の子が同じ長命種としての力をそなえているとは限らないけど、その子は確実に長命種の血を継いでるから、将来、子孫に長命種が生まれる可能性がある」

長命種がいなくなったら「通路門^{ゲート}」とか使えなくなるし、困る人は多そうだ。

なるほど、と納得している私に、「そこで納得されるんですね」と九条中尉が苦笑した。

「実験動物のような扱いをするな、と言ってお怒りになる方もいらっしゃるのですが」

「今の状況で長命種が絶滅したら困る人が多いことくらい、考えればわかるし。わりと良心的な対処法じゃないの？ 無理に子ども作らせたりするわけじゃないんですよ？」

「そんなことを長命種に無理強いするような自滅的な間抜けは、そもそも護衛官になどなれませんよ。護衛官はかなり高水準で選抜されていますから」

高水準、か。

賢くて強い人たちだったんだね。

何人も判断ミスで負傷させて、申し訳ない……

「それにしても、鮫島少尉を選ばれましたか……。個人的には心から応援したいのですが、彼の場合、上がちよつともめるかもしれないですね」

「え？ 上つて、高原中将？」

「讓葉少佐の直属の上官は高原中将ですが、“血統書付き”の管理は宮迫中将みやさこですし、実際に護衛官を配置しているのは七瀬大佐です。長命種に関わることに對する決定権は、他にも何人かに分割されているんですよ」

「ふうん？ 権力の集中を避けるためかな。それで、その人たちが何をめめるの？」

「鮫島少尉は初期対応要員なんです。

これもわりと知られていることですが、初めて兵役につかれる長命種の方は、“うまく守られてくれない”んです。そもそも訓練期間もなく、いきなり実戦ですからね。ちゃんと守られてくれ、というのは難しいのかもしれませんが、ともかく入軍直後の長命種の護衛官は、かなりの苦勞をすることになります。戦闘任務の最中、動揺した長命種の魔法に、背後から撃たれて死ぬものもいるくらいです」

「それ、困るところじゃないんじゃないの？ そんな被害が出てるなら、実戦に出す前に訓練しとかないと」

「長命種の方が、みなさんそう仰ってくださいるなら楽なんです。残念ながらとにかく束縛を嫌う方が多いので、訓練ではなく、比較的簡単で安全な実戦任務を与えることで慣らしていくしかないのが現状です」

そういえば、長命種には制服の着用義務もないんだっただね……

「そして慣れるまでの間は、血統書付きではないものが護衛官につきます。それが初期対応要員です」

んんー。

“血統書付き”と言われると犬や猫を思い出すけど、「過去に長命種を輩出した血統」の「人」なんだよね。

そして初期対応要員は、「使い捨ての駒」にされる「人」か。

考え方は理解できるけど、実際にそこで使い捨てにされる人がいて、私も自分の判断ミスで彼らを負傷させてきたというのは、気分の悪い話だ。

私がそう思うのは、鮫島少尉が「使い捨ての駒」の方に入ると知ったからかもしれないけど。

「それで？ 鮫島少尉は血統書付きじゃないから、長命種にはふさわしくないと考える“上の人”がいるの？」

「一言で答えるのは難しいですね。血統書持ちの各界の名家が、いろいろと暗躍してますから」

「各界の名家が？ 暗躍？」

九条中尉は「その自覚もなかったんですね」と、ため息をつくように言った。

「讓葉少佐の姉君ですよ。讓葉一門の椿といえ、数十年前に活躍した『紅の魔女』で、現在は「ウロホロス円環の蛇」を持つ『魔導院』の枢機卿の一人。」

だいぶ前に隠遁生活に入られたのであまり有名な方ではありませんが、知っている者はちゃんと知っているんです。

その双子の妹といったら、近年稀に見る優良物件。血統書持ちの各界の名家が、かなり前から軍の上層部に取り入って少佐の護衛官の席争いをしてますよ」

そんなの知らんがな。

というか、教えといてよ椿か漣！

「……もしかして、九条中尉も？」

「当然です。私のもう一人前から、初期対応要員ではなく、通常の護衛官が入っています。

ちなみに家は軍の糧食の調達で財を成した九条一族です。当主さまから「必ず譲葉の一花を持ち帰れ」とのお言葉をいただいて参りました」

知らんかった。

ぜんぜん知らんかった、けど。

「九条中尉。それ、言っちゃっていいの？」

「あまり良くはありませんね。ですが少佐が私から聞いたと言わなければ、私が話したと知られることはないでしょう。

それに、すでに別の男を選んでいる女性にまわりついて嫌われるより、その恋路を応援して恩を売っておく方が得策だと思いませんか？」

そりゃー確かに。

でもそれ、その恩を売る相手に言っちゃってる時点で、ちょっと

どうかと思っけど。

「まあ、いいや。教えてくれて、ありがとう」

「いえいえ。讓葉少佐が「九条」という名を覚えてさえくだされば、それでじゅうぶんですから」

「……うん。ちゃんと覚えたよ、九条中尉」

「ありがとうございます」と微笑んで、最後に一つ、九条中尉は忠告をくれた。

「鮫島少尉は今私が話したことはすべて知っています。護衛官の間では常識的なことですし、少佐の護衛官の席争いはそれなりに有名になりつつある状況なので。」

あと、狙う長命種の気に入ったものを“排除”して、その後任に自分の家の血筋のものを送り込んでくる、ちよつと乱暴な人たちもたまにいますから。

彼を口説く時は気をつけてくださいね、讓葉少佐」

もう何を答える気力もなく、ため息をつきながら頷く。

……あれ？

そもそも私、何を悩んでたんだっけ？

第十五話「鮫島少尉の懸念」

鮫島少尉は強面で、眼光が鋭い。

いつもどこかにいる敵に対してそなえているかのように、無愛想な鉄面皮で五感を研ぎ澄ませている。

皐月はなついているものの、一緒に遊ぶ子どもたちは怖がって遠巻きにするし、私にお酒の肴を持ってきてくれる近所の奥さん達も、九条中尉がいる時は長々と話しこむのに、鮫島少尉がいる時はそそくさと帰っていく。

けれど彼自身は、そんなことなど微塵も気にするふうはなく、ただ淡々と護衛官の任務に当たっている。

しばらく考えて、改めて彼を見て、心が定まった。

私は鮫島少尉が、好きだ。

冷徹な軍人そのものという顔をしていても、時折、必要に迫られて触れる彼の手は優しく、疲れて沈みこんだ私にかける声には、気遣う心がふくまれていた。

彼は見た目だけではなく実際に冷徹な軍人だが、それだけではないのだと、長く彼の背に守られてきた私は知っている。

いまひとつ、どうして自分が鮫島少尉にそんな感情を持ったのかわからないが。

たぶん、長く過ごすうちに、どこかで勝手に心が落ちていたのだろつ。

けれど、それがわかったところで九条中尉が言うような「彼を口説く」とか、そういうことをするつもりはない。

面倒くさそうな“名家の暗躍”に巻き込むのは嫌だし、何より私は長命種だという意味ではなく“普通の人ではない”のだ。

今はただ、十年間の兵役をこなし、プロジェクト・ユグドラシル『世界樹計画』の行く先を見守る。

軍に入って最初につけられた護衛官は、篠田中尉と鮫島少尉。

私は篠田中尉の突然の拒絶に動揺させられてから、意識的に護衛官たちに対して距離を取ってきた。

近すぎず、遠すぎず。

これからその距離を保って、契約に従う。

x
x
x

鮫島少尉が護衛についている時間の飲酒量が、減った。

彼がそばにいと、お酒を飲んでいる時よりも気分が良いのだから、その心地よい感覚を鈍らせるようなことはしたくない。
だから自然とそうなった。

そして皐月に対しても、ちゃんと話を聞いて、その様子を見ていられるようになった。

「くー！ ゆき！ ゆきがふってる！」

「そうだねー。初雪だ。寒くなりそうだから、今日は手袋もはめようか」

「ん！ さつき、くろいのする」

「あー、黒い手袋？ 皐月はこれ、お気に入りだね。雪だるまの模様が好きなの？」

「くーと、おそろいな」

相変わらず可愛い皐月に黒い手袋をはめてやり、手をつないでいつもの表通りへと歩いていく。

そしてもう私の席と化している茶屋の店先の長イスを借りて座り、

初雪が降る下で、きゃーきゃー大騒ぎしながら走り回る子どもたちの中、の皐月を見ていた。

肌寒い空気の中で、人々はさつさと用事を済ませると、足早に我が家へと帰っていく。

その途中で温かいものを一杯求めて茶屋に立ち寄る人は、火が焚かれて暖かい奥へ行くので、店先にいるのは私と鮫島少尉だけだ。

そんな時、いつも通り遊ぶ皐月の様子をのんびり眺めている私に、珍しく鮫島少尉が声をかけてきた。

「最近思い悩んでいたようですが、何か、決断を下されたようですね、讓葉少佐」

君のことを考えていたんだと心の中で答えながら、微笑んできた。

「迷惑をかけたみたいで、悪かったね。体調を崩しているわけではないし、もう大丈夫だから、気にしなくていいよ」

「了解しました。ですが一つ、確認させてください」

妙に真剣な口調で言うので、何かあったのかと振り向くと、どこか気遣わしげな目と視線が合って驚いた。

表情がひとかけらも変わらずとも、その目の色でいくらか察することが出来る程度には長い付き合いだ。

鮫島少尉が何か、私を心配しているのだと感じ取って、どうしようもなく心が波立つ。

それでも最近は平静を装うことに慣れてきたので、できるだけいつも通りの口調で問い返した。

「確認って？」

「世界樹の若枝に対する、讓葉少佐の感情です」

皐月に対する、私の感情？

「少佐はよくご存知のことと思いますが、皐月は『世界樹計画』の進行に従って世界各地の核都市へ配布された、複数の魔法生物のうちの一体です。育成期間は二年で、残りは約六ヶ月。

その期間が終われば若枝として“世界樹の中樞”たりえるかの試験を課され、選ばれれば中樞となりますが、落ちればただ“世界樹の一枝”として、育成された都市の近くにある砂漠へ植えられます」

「うん。それは知ってるけど？」

「人づてに他の核都市での育成の様子を聞きました。

担当者は魔法使いが半数以上で、魔女はごくわずか。そして若枝に、便宜上とはいえ固有の名をつけたものも少数で、外へ連れ出して人の子どもと一緒に遊ばせているのは讓葉少佐、ただお一人のようです」

「どこも同じ環境で、同じような姿勢の人たちに育てられてしまつたら、複数体用意されて各地に配られた意味がない。だから私が他と違った育て方をしていることは、とくに問題にはならないはずだよ、鯨島少尉。

もし私の育成方針が「間違いだ」と断定できるものなら、何度も視察に来て『魔導院』から「変更せよ」とかの指示が入るだろうし」

私が答えると、言いたいことが伝わらない、という様子でかすかに苛立たしげな口調になり、鮫島少尉が言った。

「遠まわしにお話したのが間違いでした。自分は話すことが得手ではありませんので、失礼ながら単刀直入に言わせていただきます。あなたは世界樹の若枝に、感情移入しすぎているように見えるのです、讓葉少佐」

感情移入？

私はわりと、冷淡な方だと思っけど。

鮫島少尉の考えは違っらしい。

「あの世界樹の若枝とともにいると、少佐は時折、我が子を抱く母親のように見えます。微笑み、慈しみ、頬を撫でて優しく語りかける。

いずれ世界を覆う植物となるべき魔法生物に、それは必要ですか？
そのように心を移して、必ず来る別れの時、何の問題もなく手放すことができるのですか？ 讓葉少佐」

なんだ、そんなことか。

「何も問題はないよ、鮫島少尉。

世界樹の若枝は愛されるべき幼い子どもの姿で私の元へ来た。だから私はごく普通の人がそうするように、幼い子どもへ与えるべきものを与えた。

私は最初から皐月が世界樹の中枢になれるとは思っていないから、世界樹の一枝として砂漠に植えられることも承知している。当然、二年という与えられた育成期間をすぎれば、手放さなければならぬものだということも。

ただ、皐月が植えられた砂漠に根を下ろすのに、もしも「なぜ自分がこの砂漠の魔物を抑えなければならないのか？」という問いが出てきたら。

その時は、「この地に住む人を守りたいからだ」という答えを持つてくれたら良いなど、思っている」

数秒の沈黙の後、鮫島少尉はいくらか納得した様子で「出過ぎたことを言って申し訳ありませんでした」と言い、それきり口を閉ざした。

彼に言ったことは本心で、私は本気で何の問題もないと思っていた。

けれどいつだって、想定外の事態は知らぬところで起きるのだ。

第十六話「露草の決断」

初雪が降ってから、数週間後。

寒い冬の日の朝に、まばゆい陽の光で目覚めた皐月は上機嫌で窓の外を見に行った。

「くー！ きょう、はれた。おそろ、あおいよ！」

ぼーっとした私がベッドに寝転がったまま「そりゃー良かったねー」と答えると、ぱたぱたと走って戻ってきて、何かを差し出す。

「まどのした、おちてた」

窓の下に落ちていた手紙を持ってきてくれたらしい。

昨日、そんなところへ手紙を持ち歩いた記憶などなかったが、「ありがとう」と差し出されたものを受け取った。

「ん？ 青桐中佐から？ ……いや、もう“中佐”じゃないのか」

ぶつぶつ言いながら封を破いて中の紙を取り出し、右上がりに駆け抜けるような特徴的な字でつづられた手紙を読んで、その内容に硬直した。

数秒、あるいは数分の思考停止。

それが解けると一瞬で頭が動き出す。

「漣、出てきてこの手紙読んで」

ベッドの上に手紙を放って呼び、銀の指輪についた透明な珠から出てきた椿の使い魔に言う。

その間に床へ降りた私は部屋を走り回る皐月を捕まえて抱き上げ、近くにあったイスに座らせて「少しの間、ここに座っていて」と指示した。

皐月は常とは違う私の様子を敏感に感じ取り、不思議そうな顔をしながらも頷いて、おとなしくイスに座る。

私は皐月から離れ、部屋に置かれた戸棚から必要なものを取りだして大容量鞆へ詰め込む荷造りを始めた。

今は動くべき時だ。

感情を一時的に心の奥底へ沈め、どう動くか考えることに集中する。

×
×
×

プロジェクト・ユグドラシル
『世界樹計画』が中止になる。

前から推進派と反対派でモメてたのはお前も知ってると思うが、新しく入ったばかりの俺にまで話が聞こえてくるくらいだから、今回の中止決定はほぼ確実だろう。

お前は『魔導院』に來なくて正解だ。

ここは“魔法研究の最高峰”だが、同時に“ドロ沼化した長命種の権力争いの中心”になってる。

今回の『世界樹計画』の急な中止についても、『世界統合機構』や『エイリー教』の連中からの反対意見が来たり、どっかの都市で騒動が起きた影響っていうより、ほとんど「推進派の中心人物の急死で反対派が勢力争いに逆転勝ちした結果」だ。

アホらしいが、ここも軍と同じ。

権力握ったヤツの命令が通る。

ウワサによると、『世界樹計画』の中止は若枝の担当者たちに通告されない。

世界樹の“根”を殺せば、そいつとつながってる若枝は自動的に全滅するようになってるらしい。

だから世界樹の根を殺して、若枝を配布した核都市からの「若枝機能停止」の報告を待ち、万が一その報告がない都市があれば『魔導院』が生きのびた若枝を処理しに行く。

反対派の連中は、推進派が体勢を立て直す前にやる気だ。
時間がない。

だから、これを知ったお前がどうするかはわからないが、とにかく知らせることにした。

この手紙の礼は今度会った時に何かでもらうからな。
それまでは死ぬなよ。

棗

× × ×

「露草、読み終わったよ」

漣が言うと、私はその手紙を燃やすようシガーに命じた。

「それで、露草。ぼくには君が迷いなく逃げる用意をしているように見えるけど、本気？」

「本気。世界樹の一枝として砂漠に植えられることについては覚悟してたけど、わけもわからずいきなり殺されるのを黙って待つ覚悟をする気はない。」

そんな覚悟をするには情を移しすぎたよ。……椿のことを笑えなくなっただね」

自嘲気味に笑ってみせると、漣は金色の目に私を映して訊いた。

「君が今考えてることを実行したら、その結果、何がどうなるかわかってる？」

「自分がどうなるかはわかってる。でも、椿にどういう波紋が行くかがわからない。だから漣を呼んで、手紙を読んでもらったの」

いつもより早口になっていることに気づいて、ひとつ深呼吸。
体を落착かせて、言葉が続ける。

「双子の妹が世界樹の若枝を連れて逃げたら、双子の姉は何かの罪に問われる？」

「うーん。どうだろうね？ 休眠中の魔女が、双子の妹のやったことで責任を問われる、なんていう前例は聞いたことないけど。」

でも、もしも責任を問われたとしても、椿は怒らないよ」

「……私の勝手な行動で責任を問われても、怒らない？ そんなこと、どうして断言できるの？ 漣」

「椿は昔【大和】に住んで、今の露草と同じように兵役についたりしてたんだけど、恋人が死んだり、親しい人が死んでいくのに耐えられなくなつて樹海にもぐつたんだ。」

その名の通り、長命種は普通の人より長く生きるのが当たり前だから、他の長命種たちは人の死にわりと鈍感にできてるんだけどね。ぼくの主は、例外だった」

椿は恋人を、失ったことがあるのか。

「だから今、露草が皐月を連れて逃げようとするその気持ちを、椿は理解できる。」

怒ったりなんてしないし、それで「ウロボロス円環の蛇」を取り上げられて

も、むしろ「縁が切れて清々した」とか言つよ、きつと。

そもそも「円環の蛇」は椿が望んで得たものじゃなくて、讓葉一門の魔女を手放したくない『魔導院』が強制的にはめさせてるだけだし」

それなら。

「私はここから逃げてもいいの？ 漣」

「君が望むなら、ぼくはそれを支持する。
もちろん、ぼくも一緒に行くからね」

漣の答えに、心の底からほっとして、「ありがとう」とつぶやく。そうしてようやく、自分が精神的に追い詰められた状態にあったのだと気づいた。

もっとしつかりしろと、声には出さず自分を叱咤する。

冷静にならなければ、皐月を連れて逃げるのは自殺行為にしかない。

魔法研究の最高峰である、『魔導院』の決定に逆らおうというのだから。

「ところで、露草。逃げた後はどうするの？」

「ひとつだけ考えがあるから、それを実行する」

「ふうん？ 露草に考えがあるならいいけど、必要なら椿の隠れ家

に案内するから、言ってね」

漣は頷く私に「あとひとつ」と、言葉が続ける。

「動くなら夜にした方がいい。昼はいつも通りに過ごして、暗闇にまぎれて姿を隠そう。」

だから今日はいつも通りに過ごすんだ。

それで夕方くらいに、お別れを言いに行っておいで」

頭の中に浮かんだ、ひとりの人の姿に、ぐつと唇を引き結ぶ。

「皐月はぼくが見ててあげる。同じ都市内なら指輪から離れても大丈夫だから」

黙りこんでいる私にそう言って、漣は指輪の珠へ戻った。

私は不安そうな顔をしてちょこんとイスに座っている皐月と目を合わせ、「何でもないよ」と言って、そのちいさな体を抱きあげる。

「くー。いたい？ おなか、いたいの？」

「大丈夫だよ、皐月。私は大丈夫」

心配そうに私の頬を撫でる皐月に微笑み、いつも通りの一日を送るべく、食堂へ降りていく。

今日の護衛官は鮫島少尉で、午後から九条中尉と交代することになっている。

私は表通りで皐月を遊ばせ、茶屋の奥さんにだんごを一本サービスしてもらい、金物屋の主人が客と乱闘騒ぎを起こすのを止めて、日が傾きはじめると城砦へ帰った。

遊び疲れてうとうとまどろむ臯月をベッドへ入れ、漣にまかせて
九条中尉に見つからないよう城砦を抜け出す。

黄昏時。

葡萄酒のボトルと肴の乾燥果実ドライフルーツを片手に、私は初めて訪れる部屋
のドアをこんこんと叩いた。
中で足音がして、ドアが開く。

「何だ。……讓葉少佐？」

予想外の来客に驚く平服姿の鮫島少尉に、お酒と肴を見せて言っ
た。

「ちよつと一杯、一緒に飲まない？」

第十七話「別れの挨拶」

鮫島少尉が入っているのは二人部屋で、同室の人は長期任務中でないらしく、それは都合が良いと私はにっこり笑った。

部屋に入れるのをしぶる彼を、「たまにはいいでしょ」と強引にまるめこみ、止めようとする手をするりとかわして部屋へ入る。

「グラスある？　なかなか上物の葡萄酒ワインなんだよ」

「本気でここで飲むつもりなんですか」

窓辺にあるイスに座って言う私に、鮫島少尉はため息をついて諦め、グラスを二つ持ってきて向かいのイスに座った。

間にある机に肴を置いて、グラスに葡萄酒をつぐ。

「悪いね、押しかけて。でも一度一緒に飲んでみたいと思ってたから、嬉しいよ」

「……それはどうも」

「そんな困った顔しないで、ほら、飲んで飲んで。なかなかおいしいでしょ？」

「……ええ。確かに、味は良いです」

そうして渋面の彼にグラス二杯ほど飲ませてから、私はぽつりと言った。

「ごめんね、鮫島少尉」

「何がですか？」

「今君が飲んでる葡萄酒、睡眠薬入りなの」

一瞬動きを止め、次いで自分の体を見おろしてから、鮫島少尉は私の方を向いて言った。

「何も異常ありませんが」

「うん。ゆっくり効いてきて、ことん、といくものだから。それにしても、君、強いね。もうそろそろ眠気を感じてもいい頃なんだけど、本当に何も感じない？」

「何ともありません。それより、あなたも同じ酒を飲んでいるはずですが？」

「私は魔法薬を無効化する薬を飲んでから来たの。だから何杯飲んでも平気」

深々とため息をつき、鮫島少尉はイスの背にもたれて姿勢をくずした。

「それで？ おれに睡眠薬を仕込んで、いったい何をしようというんです？」

リラックスした鮫島少尉は初めて見る。
なんだか新鮮で楽しい。

だけど、これが最初で最後。

「お別れを言いに来た」

鮫島少尉は速攻でつつこんできた。

「何ですか、いきなり。意味がわかりません。もっと具体的に説明してください」

「……うーん。一言で説明するなら、皐月が殺されそうだから逃げるんだよ」

「皐月が殺される？ 『エイリー教』の過激派から脅迫状でもきたんですか？」

「『プロジェクト・ユグドラシル』が中止になったの。棗が知らせてくれた。世界樹の根を殺して若枝たちを全員機能停止に、皆殺しにする予定だそうだよ。担当者への事前通告無しでね」

さすがに鮫島少尉も絶句したが、すぐに立ち直った。

「その話は確かですか？」

「手紙は確かに棗の字だったし、時間がなさそうだからとにかく知らせる、と書いてあった。間違いならそれでいい。でも間違いじゃないなら、何もしないうちに皐月は殺される」

「だから連れて逃げると？」

「そう」

頷くと、怒鳴られた。

「馬鹿ですかあなたは！」

ドンツと机を叩いて立ちあがった彼の怒気に圧倒され、思わず息をのむ。

「だから言っただ、感情移入しすぎだと！ 『魔導院』の計画によつて作られたものを連れて軍から逃げるなど、自殺行為だと理解できないのか？」

「理解はしてるよ。だからお別れを言いに来たの」

「そうじゃない！ そもそもどうしてそうなるんだ？ あなたが皐月と呼ぶあれは、あなたの子どもではない。たまたま作られて配られた魔法生物が気に入ったからといって、それと心中するのはおかしいだろう」

そうだね。

私、おかしいのかも。

でも、どうしても皐月を見殺しにできない。

「いめんね、 鯨島少尉」

微笑んで言うと、それまでの怒気が抜けて、呆けたような鮫島少尉がどさりとイスに座った。

大きな手で自分の顔を覆い、指の間から低い声で言う。

「もう決めているんですね。おれが何を言っても、あなたはその決定を変える気はない」

「そう。だから、お別れを言いに来たの」

「おれが何を言ってもどうする気もないなら、どうしてそんなことをするんです？ おれはたまたま配属された護衛官で、あなたは知らないかもしれないが、ただの捨て駒だ。家族もなく、いつどこで死んでも誰も気にしない」

「そんなことないよ。君が死んだら、私は悲しい」

たぶん、悲しいどころじゃない。

思わず言ったら、鮫島少尉は手を下ろし、真っ直ぐに私を見た。

奇妙に緊張した、数秒の沈黙。

鮫島少尉が訊く。

「教えてください、譲葉少佐。別れを言いに来るのに、先に睡眠薬入りの酒を飲ませたのはなぜです？」

「一言別れの挨拶はしておきたかったけど、その後で私達の脱走を上に報告されたら面倒だなと思って」

「それは理由の一つかもしれませんが、本心ではないでしょう。何年そばにいたと思ってるんですか？ その間、おれはずっとあなたを見てきたんです。それくらいわかる。

今から脱走するというのなら、これで最後なんです。正直に、思ったことを言ってください」

自信過剰だと思われそうな考えだから、言いたくなかったんだけど。

眼光鋭い鮫島少尉の顔から視線をはずして、しぶしぶと、つぶやくような声で答える。

「……もしも、一緒に行くって言われたら、困るから」

そんなことはありえないと、わかっている。

ただの私の願望だ。

そんなセリフが鮫島少尉の口から出てくるはずがない。

その、はずだったのに。

「おれのことをよく理解してますね、讓葉少佐」

かすかな微笑みを浮かべて、鮫島少尉がそう言った。

第十八話「黄昏の中で」

聞き間違いだろうと思った。
それくらい信じられなかった。

けれど鮫島少尉は、微笑んだまま言葉を続けた。

「任務ではなく、自分の意思であなたを守りたいと思っていました。
ただそばにいたいと。」

おれも一緒に行きます。連れて行ってください、……露草」

これが現実だということが理解できなくて、動けなかった。
鮫島少尉はかたとイスから立ちあがり、驚きに固まる私の傍ら
に來ると、片膝をついた。

「ひとつ聞かせてください。あなたが別れの挨拶をしたのは、おれ
だけですか？ それとも、九条中尉や他のものにも？」

言葉が出てこず、首を横に振って、間近にきた鮫島少尉の顔を見
つめ返す。

彼にもこんな表情ができるのだとは、思いもしなかった。

「そうですか。良かった。それならおれの勘違いというわけではなさそうだ」

彼の大きな手がそつとのばされ、私の頬を包み込むようにして触れる。

一瞬びくつとしてから、ため息をつくようにまぶたを閉じて、その手に頬をすり寄せた。

無骨な指が頬を撫でるのにかすかに震えながら、ちいさな声で言う。

「ずっと君の背中に守られてたんだよ。疲れてへこんでる時には優しくしてもらった。青龍にだって、一緒に食われかけたし」

暗闇の向こうで笑う気配がして、思わずまぶたを開けば。黄昏の陽射しの中で穏やかに微笑む顔。

いつまでも見ていたい人が、そこにいて。

「だから、したって、いいでしょ。……恋くらい」

つぶやくように言うと、彼が動いた。

唇が触れる。

その瞬間、油をかけられた炎が一気に燃えあがるように、私は我を忘れて彼に溺れた。

それは口づけなどという甘ったるいものではなく、お互いがお互いを食らい合うような、むさぼるようなキスだった。

キスの仕方なんてろくに知らなかった私は、ただ本能でより深く彼に触れようと唇をひらいた。

体を抱き寄せる腕も、もたれかかった胸もがっしりとして堅いの
に、唇やその奥は驚くほどやわらかい。

そして葡萄酒の味がして甘く熱く、ほろ苦く。

息をする余裕もなく、どれくらいそれに没頭したのかもわからなくなつた頃に、鮫島少尉が離れた。

一気に空気を吸いこんで肩で荒い息をしながら、いつの間にか床に座り込んだ彼の、膝の上に抱かれているのに気づく。

「露草。おれを連れて行ってくれますね？」

私より早く呼吸を整え、鮫島少尉が訊いた。

激しいキスの余韻にとらわれ、ぼうつとした頭で、私は首を横に振る。

「無理だよ、鮫島少尉。私は魔女としてはまだ未熟な方だし、腕も二本しかない。臯月を抱いたら、もう、他のものは守れない」

「それでいい。おれは自分の身は自分で守ります。そして、臯月を抱いたあなたを、おれが抱きます」

低い声がゆるぎない意思を持って言うのに、味わったことのない幸福感で心が満たされる。

けれど同時に、胸が締めつけられた。

「それより、露草。いつまで「鮫島少尉」と呼ぶんです。まさか、おれの名前を覚えていないということですか？」

ちいさく笑って、顔を突き合わせているのが奇妙に恥ずかしくな
って、彼の肩に頬を寄せる。

書類で見て覚えているけど、護衛官たちと距離を置くために、あ
えて誰の名も呼ばないできた。

そして今も、彼の名を呼ぶ気はなかった。

「ありがとう、鮫島少尉。でも私のことはこれで忘れて。私は軍と

『魔導院』に追われることになるから」

「あなたもいいかげん強情ですね。おれは一緒に行くとやっているんです」

「でも、それはできないんだよ。君はもうすぐ、半日は目覚めない、深い眠りにつくんだから」

「先ほども言いましたが、何も感じませんよ。薬の種類か、分量を間違えたんじゃないやありません、か……？」

言いながら、かすかに顔をしかめて額に手を当てる。

「ようやく効いてきたみたいだね。本当、君は何に対しても強い」
「皮肉ですか」

苛立たしげに言つて、私の体を抱く腕にぐつと力を込める。

「露草。皇月は連れていくのに、どうしておれは連れて行ってくれないんですか？」

「いや、そもそも皇月を助けるために逃げるんだよ。だからその質問はおかしい」

「おかしいのはあなたです」

なんだか変な会話になった。

私達は何を話しているんだろう？ と首を傾げると、鯨島少尉がまた私の頬に触れた。

顔の輪郭をたどるように無骨な指が動き、頬をすべってあごを撫で、唇をなぞる。

思いがけない繊細な動作に、体の奥が細波立つ。

「……おれが眠るまで、あと、どれくらいありますか」

たぶんもう、すこしだけ。

ちいさく息を吸い込んで、視線をあげた。

怒っているのでもなく笑っているのでもなく、何を考えているのかわからない不思議な表情をした鮫島少尉に、言う。

「鮫島少尉。もう本当にこれで最後だから、今から君が眠るまで、何でも好きにしていよ。

部屋を出て誰かに私の脱走を報せてもいいし、他にも何でも、したいことをしてい。

私は後で文句言ったりしないから」

つぶやくように、低い声が訊く。

「……なんでも？」

私は答える。

「なんでも」

鮫島少尉には考える様子も、迷うそぶりもなかった。
ただゆっくり、ゆっくりと近づいてきて。

優しく、やさしい、キスをした。

第十九話「樹海の底」

鮫島少尉の部屋から皐月と漣のいる城砦の部屋へ戻ると、夜闇にまぎれて核都市【大和】を出た。

あとどれくらいの時間が残されているのだろっ。

世界樹の根が殺される前に、軍や『魔導院』に見つかる前に、皐月を連れていかなければならない。

樹海に入ってしばらくしてから、飛行できる魔物の姿になった漣の背に乗った。

姿隠しと加速の魔法の他、軍や『魔導院』からの追跡をかわすための魔法をかけ、出立する。

「目的地は？」

真冬の夜空へ舞い上がった漣に訊かれ、眠る皐月を腕に抱いて答えた。

「琵琶湖へ」

×
×
×

時折短い休憩をとりながら、ひたすらに北へ飛んだ。

皐月は目を覚ますと空を飛ぶという初めての体験に喜び、「これから湖へ行くんだよ」と言つと、きらきらと瞳を輝かせて「みずうみつて、なあに？」と訊いた。

たくさん水があつて、魚がいて。
大きくて青い、龍のいるところだよ。

樹海の上を飛びながら、好奇心旺盛な皐月が「あれはなあに？」と指差して訊いてくるのに答え、焦燥感に波立つ心を平静に保つことに集中した。

誰かが私が「龍の雲石」を持っていることを思い出し、琵琶湖へ追手を差し向けるかもしれない。

それでも皐月の体を構成する魔法を理解していない私には、他に頼るあてがない。

行くしかない。

そして、青龍に頼んでみるしかない。

失敗した時のことは考えないようにして、「くー」と呼んで見あげてくる皐月に、「なーに？」と笑顔を返した。

×
×
×

【大和】を出た翌日。

皐月が急に怯えだした。

「くー、おかあさん、こわいって、いってる。おかあさん、こまってる」

ふるふると青い顔で震えながら言うのを抱きしめ、世界樹の根が殺されようとしているのだろうと思った。

いつも手続きだ何だとなかなか動かないくせに、どうしてこんな時だけ仕事速いんだ『魔導院』。

まだ棗の手紙が届いた、翌日だぞ。

「くー、どうしよう？ おかあさん、いたいていってってる！」

皐月が転がり落ちそうな勢いで暴れはじめたので、漣に頼んで樹海に降りてもらった。

泣き叫ぶ皐月が自分を傷つけないよう、全身で抱きしめる。

「いたい！ いたいよ！ どうして？ なんで、おかあさん、いたいのに！ どうして、やめてくれないの！」

小さな手が何度も私の背を叩き、薄い爪が首をひつかいた。

皐月は自分は何をしているのかもわからない様子で、ぼろぼろと涙をこぼしながらひたすらに叫んだ。

「やめて！ いや、やめて！ いやああーっ！！」

断末魔の悲鳴のような絶叫の後、幼い体から力が抜けた。

しんと静まり返った、樹海の底。

腕の中でぐったりとしてまぶたを閉じる皐月を見おろす。

「皐月。……皐月？」

何度呼んでも、体を揺らしてみても、答えは返らない。

私は腕に皐月を抱きなおし、顔をあげた。

「漣。まだ飛べる？」

「飛べるよ、露草。でも、どこへ行くの？」

「琵琶湖へ」

漣は金色の目を閉じ、深い息をついた。

それが諦めのため息に見えて、私は吹き荒れる感情のまま叫んだ。

「まだ死んでない！」

驚いて目を見開いた漣の視線で、取り乱したことに気づいた。

ふー、と意識して長い息をついてから、できるだけ冷静に言う。

「怒鳴ってごめん。でも聞いて、漣。棗の手紙にあったでしょ？」

『魔導院』が告知なしで世界樹の根を殺した後、核都市から「機能停止」の報告が無かった場合は、『魔導院』が“生きのびた若枝”を処理しに行くって。

つまり、根が殺されても若枝が生きのびる可能性はあるんだよ」

皐月の体は、まだあたたかいの。

見つめる先で、漣が体を低くかがめた。

「乗って、露草。行くよ」

私は腕にしっかりと臯月を抱き、その背中へ飛び乗った。

第二十話「水底の夢」

人の目から魔法で隠れ、翼持つ魔物の姿をした椿の使い魔は、音もなくふわりと湖のほとりへ降り立った。

私は片腕に皐月を抱いてその背からすべり降りると、もう片方の手で首にかけてずっと持ち歩いていた、青い雫石を取る。

その時。

「讓葉少佐」

不意に背後から声をかけられて、ぴくりと肩が動いた。本能が「敵だ」とささやき、反射的に体が戦闘に備えて鼓動する。

そうして身構えながら、奇妙なほど冷静に振り向いた。

聞き覚えのある声の主は、一点のしみもない真白のローブをまとった男。

確か、皐月の様子を見に来た、『魔導院』の魔法使いだ。

「プロジェクト・ユグドラシル
『世界樹計画』は終わりました、讓葉少佐。あなたが腕に抱いたそれはもう、機能を停止しています」

返事はせず、目の前にこの男がいる、ということの意味を考えていた。

『魔導院』の追手にしては、あまりにも早すぎる。

軍が私と皐月の不在に気づき、脱走と判断して『魔導院』へ連絡した後でしか、『魔導院』からの追手は動かないはずだ。

けれどこの魔法使いは私が来るよりも早く琵琶湖にいて、待ち伏せていた。

たった一人で。

その意味するところはひとつだろう。

はめられた。

どこからどこまでがこの男の策略かはわからないが、とにかく私は罠にかかったのだ。

肌の下に煮えたぎるような怒りをはらみながら、淡々とした口調で問うた。

「狙いは龍の雲石？」

「話の早い方で助かります」

魔法使いは無表情に答えた。

「それを譲っていただけるのなら、今回のあなたの暴走について、私が『魔導院』と軍をなだめましょう」

「断つたら？」

まったくの無表情だった顔にふわりと浮かんだ微笑みと、物騒な沈黙が答えだった。

私を殺して奪うだけ、か。

彼にとって、それはたやすいことだろう。

この世界に生まれて年齢分の経験を積んでいる『魔導院』の魔法使いと、短い期間で戦い方を教えられただけの私では、比べるまでもない。

姿隠しの魔法をかけているにもかかわらず、彼にはまったく問題なく見えている辺りで、その力量差ははっきりしていた。

「今ここで私があなたを殺して隕石を持ち去っても、誰も私を罪に問えない。むしろあなたを片づけたことで、評価が上がるくらいだ。あなたは『魔導院』の所有物である“世界樹の若枝”を奪い、軍から逃げ出した罪人なのだから」

そつなるように仕向けた男が、押し黙る私に傲然と言う。

「“世界樹の根”が完全に息絶えた今、若枝はもう生きてはいけません。わかるでしょう？　今さら龍を呼んでも無意味なのです。彼らとて、死せるものを呼び戻すような力はないのですから。」

さあ、雫石を渡しなさい。それはもっと、有効に使われるべきものです」

ふと、笑みが浮かぶのを感じた。
定まった心が表に出たのだろう。

私はいつもの口調で答える。

「残念だけど、君と私では“有効”の定義が違っようだ」

微笑みを消し、感情のない声で魔法使いが答える。

「そうですか。それはたいへん残念です」

湖上を渡る冷たい風が吹き抜け、数秒。

「シガー！」

呪文の詠唱なしで放たれた風の刃に、私の呼び声に応えた炎の獣

が右肩の紅珠から現れて、ごうつと猛火を吐きだし対抗する。
風と炎。

それが含む魔力と魔力の激突によって、衝撃波が発生する。

私はそれに抗わず、臍月を抱いて自ら跳んだ。

空中で呪文の詠唱なしに炎の攻撃魔法を撃ち、吹き飛ばされる方向を修正。

一瞬の浮遊感の後、背中の衝撃とともにざばんつと派手に飛沫の散る音がして、凍える水の手に全身を抱かれた。

うまく呼吸ができず、押し寄せる水に口をふさがれる。

予想以上に体が動かせず、凍える腕や足は何かにからめとられたように重くて、瞬く間に沈んでいく。

血相を変えた魔法使いの攻撃を阻む漣とシガーの背に、ごめん、とつぶやいた。

又シどの

お願いです

青い、青い、龍の君よ

雫石は投げ入れられた

「皐月を、たすけて……」

真冬の湖に皐月を抱いたままゆっくりと沈んでいきながら、私は意識を失った。

×
×
×

ゆらゆらと揺れる水底で、皐月が私を呼んでいた。

「くー？ どこにいるの？ くー？」

その声が、怯えておらず、痛がってもいないのにほっとして、答えを返す。

ここにいるよ。

皐月の「くー」は、ここにいる。

皐月はなかなか私を見つけれなかったが、何度か答えると、ようやく見つけれられたようだった。

「くー！ みーつけたっ！」

嬉しそうな声ではしゃぐように言う皐月が、手を伸ばして私の体をすくいあげる。

おやおや。

私の体を手ですくうなんて、皐月、いつの間にそんなに大きくなったの？

それともこれは、夢だろうか。
最期の、夢？

「だいじょうぶよ、くー。こんどは、さつきが、くーをまもるの」

ああ、皐月。

君はそんなこと、何も気にしないでいいんだよ。
君達と会えたのは楽しかったし、嬉しかったけど、棚からぼたもちみたいに降ってきた命だから、たぶんそれほど長くはいられない

だろうと思つてたし。

それに元から私は心が弱くて、親しい人を失うと生きていけないんだ。

突然の事故で家族を失つて酒とタバコに溺れた前世のように、もし何もできず君を失っていたら、きっとまた何かに溺れて無意味に死んでいただろう。

私の死とともにシガーが消滅してしまうというから、それは寂しいけど。

今さらどうしようもないから、仕方がないと諦めてもらって、シガーには一緒に来てもらうよ。

ねえ、皇月。

青龍は、君を助けてくれたのかな？

そうだったら、いいな……

微笑んで、思つて。

また、意識が消えた。

第二十一話「夢の先」

「……ろ！ 起きろ、露草！」

低い声がおどすような口調で叫ぶのに、目が覚めた。

カーテンのように周りを覆う緑の蔦を押しつけた鮫島少尉が、私を腕に抱いて見おろしている。

何が起きているのか理解できず、ぼーっと見あげていたら怒られた。

「起きたなら返事くらいしてください！ 聞こえてるんですか？ 露草」

強い口調で言いながら、不安そうにゆれる目が愛おしい。

うまく動かない手を持ち上げて、ふらふらと揺れる指先で、いかつい顔の、頬に触れた。

「きこえてるよ」

すると、無愛想な鉄面皮の意外と感情豊かなその目から、ほろりと透明な雫が流れ落ちた。

初めて見た鮫島少尉の涙は、ほろほろと流れてすべり、私の上に

降ってくる。

驚いて、何が起きているのかさっぱりわからず混乱したけど、ただ苦しそうな彼をなぐさめたくて言った。

「だいじょうぶ」

ゆっくりと腕を動かし、大きな体を抱きしめて、繰り返す。

「もう、だいじょうぶ」

力強い腕が、無言で私を抱き返した。

× × ×

私が皐月を抱いて湖に落ちた後、何が起きたのか聞いて、また驚いた。

約束の雫石を湖に受けて、青龍が出現。

私の願いを叶えると言って瀕死の皐月に自分の力を与え、その本性を取り戻させて生きのびさせた、というのだ。

その結果。

琵琶湖のほとりに巨大な樹がそびえたって、青龍の隣人となり。
私達は今、皐月だったその巨樹の虚うつろの中にいる。

「あなたは樹としての本性を取り戻した皐月に、湖の底から引き上げられたんです。ただ、冷たい水の中に落ちて仮死状態になっていたので、皐月が自分の中へ入れて治癒の力を集中させることで、なんとか呼び戻したそうです。

そしてようやく今日、あなたが起きそうだから中に入って良いと皐月が許可を出してくれたので、おれが入りました。

皐月はあなたを助けるのに力を尽くしたので、今は疲れて眠っています。起きたら話せるでしょう」

夢ではなく、本当に皐月が私をすくい上げて助けてくれたのだと聞いて、思わず笑ってしまった。

ずっと私が皐月を抱っこする側だったのに、ずいぶんと変わってしまったものだ。

「笑いごとではありませんよ、露草。今、この樹の周りでは大変な騒ぎが起きているんです。中止された『世界樹計画』の中の一枝が生きのびて、なぜか琵琶湖に根付いて成長してしまったのですから。しかも『魔導院』の魔法使いの目の前で」

あー……

確かに、笑いごとじゃなさそう。

鮫島少尉の膝の上に座ったまま、樹の状態じゃ逃げられないし、どうしよう？ と青ざめていると、緑の鳶のカーテンの向こうから、懐かしい声がした。

「うちの妹を脅かすな、青二才。龍の上に投げ落とすぞ」

慌てて緑の蔦の向こうへ行こうとする私を、鮫島少尉が止めた。
たくましい腕に小柄な体をしっかりと抱いて、立ち上がりながら
低い声で答える。

「あまりにも危機感がない様子なので、すこし現状を把握してもら
おうと思っただけです。あなたは妹を甘やかしすぎですよ」
「姉が妹を甘やかして何が悪い」

外から即答されるのにため息をついた鮫島少尉が、やっと緑の蔦
の向こうへ連れ出してくれた。
めまいを起こしそうな高さにある巨樹の枝の上に、白い猫を膝に
抱いた魔女が座っている。

「椿！ どうしたの？ 休眠期は？」

久しぶりに会った椿は、にっこり笑って答えた。

「気合いで起きた」

「え。いや、魔女が“気合い”ってどうなの？」
「成せばなる。それより露草、大活躍だったな」

起きた理由は適当に流し、椿はのほほんと言う。

「『世界樹計画』は“中止”ではなく、“一部変更”となった。

皐月は「露草を守る」という意志の元に確固たる自我を築き、しかも青龍の加護まで得て理想的な世界樹の中枢に育った。

それでこれを利用しない手はないだろうと『魔導院』の計画推進派の連中が大喜びしたので、わたしが取りまとめて、ついでに反対派のトップを蹴倒してきたんだ」

蹴倒してきたのか。

ありがとう、椿。

ついでにもう何発か蹴飛ばししてもらってもいいよ。

「しかし肝心の中枢、世界樹たる皐月が「くーがおきるまで、ほかのことはしない」と言いだしてな。まあ、お前を守るという一念で確固たる自我を持ったのだから、当然のことなのだろうが。」

わたし達がいくら世界各地の砂漠に枝をわけてくれと頼んでもまったく聞いてくれないから、いっこうに話が進まないのには困った」

「ちょっと待って、椿。確認させてほしいんだけど、『魔導院』はまた『世界樹計画』の推進に戻ったの？」

「ああ。“世界樹の根”を殺しておきながら、今さらそれは通らないだろう、と思っっている様子だな。」

しかし、露草。人などそのようなものだよ。その時の勢いに流れ、危険だと判断した相手に対しては容赦なく攻撃し、利用できるものだ と判断したものはとことん利用しつくす。

ならばこちらでも利用できるものは利用すべきだ。君一人で皐月を守るのは、もう無理だろう」

だから『魔導院』の計画推進派を利用して、皐月を守らせるべきだということか。

「露草。今の皐月は君の言葉しか聞かない。母親である根を殺されたことで、人間に対する不信感が植え付けられてしまったからな。反対派はそこを突いて、今も「切り倒すべきだ」と叫んでいる。」

推進派は龍の加護を得て立派に育った世界樹を守ろうとしているが、肝心の世界樹に信用されていないということに懸念を覚える者も多い。

わたしは個人的に、人を盲信する魔法生物より、人に対してある程度の警戒心を持った魔法生物の方がしぶとく臨機応変に育つてくれるから、これはこれで良いと思うんだが。

まあ、ともかく皐月は一刻も早く自分の能力を示し、世界にとって有益であるということをしめなければ危うい立場だということだ」

うーん。

またいつでもひっくり返りそうな状況……

「ねえ、椿。皐月はもう人型には戻れないの？」

「おそらくそれは無理だろう。完全にこの地に根付いてしまっているからな」

それならもう、腹をくくるしかない。

「皐月が砂漠に枝をわけて、魔物を抑えるのに成功したら、『魔導院』はこれからも皐月を守るんだね？」

「ああ。そうなれば『魔導院』だけでなく、『世界統合機構』も警備に当たるようになる。皐月は万全の態勢で守られるだろう」

わかりやすい取り引きだ。

今はまだ感情的に「『魔導院』キライ」と言いたいところだけど、長い目で見ると協力した方が皐月のためになる。

「わかった。皐月と話すよ」

「そうか。話してくれるか。ありがとう、露草」

「皐月が協力するかどうかわからないから、お礼はまだいいよ。……そういえば、棗は？ 私に『世界樹計画』が中止になったって教えてくれた、青桐一門の魔法使いなんだけど。何か罰とか受けてない？」

訊ねると、その場にいた全員の様子が変わった。

椿と鮫島少尉は不機嫌になって、白い猫だけがおもしろそうにしゃべりを揺らしている。

「青桐の棗か。それが君を毘にはめるのに利用されてくれた若造のことなら、ああ、勿論罰を受けている」

ひんやりとした口調で答えた椿に、すぐには意味がわからず、「どういうこと？」と首を傾げた。

すると今度は、椿の膝の上から漣が答えてくれた。

「青桐は君を湖へおびき出すのに利用されたんだよ。待ち伏せしてたあの男にね」

その時は落ち着いて考えてなどいられなかったが、聞いてみれば単純な罠だった。

皐月の様子を観察する役だった『魔導院』の男は、『世界樹計画』の中止を知り、それに便乗して私から龍の雫石を奪う計画を思っていた。

時期を見計らって棗に情報を流し、私に報せが行くようにして、自分は琵琶湖で待ち伏せる、というものだ。

そうして棗は“たまたま聞いた話”について手紙を出し、私はあっさりその罠にかかって湖に現れた。

しかし、最後の最後で雫石ごと真冬の湖に落ちるという自滅的な行動に出たので、まさかそこまではするまいと思っていた彼の計画は失敗に終わった。

ちなみにその後、龍の出現と世界樹の急成長に呆然としていた彼は、これは寝ている場合ではないと飛び起きてきた椿によって捕えられた。

「寝起きの椿は機嫌悪いし、ぼくの目を通して露草に何をしたか全部見てたからね。あいつボロ雑巾みたいになるまでお仕置きされたんだ。たぶんまだ生死不明で『魔導院』の医務室で寝てるんじゃないかな」

椿は首を横に振った。

「漣、わたしは致命傷は与えていない。あれは間もなく目をさまし、己の行いについて正式に罰せられるだろう」

お仕置きされた上に処罰されるのか。

私が殴るヒマもなさそうだなー……

「それと、あの男に君が雫石を持っていると情報を漏らした【大和】

の魔道具開発部の鑑定士も、それなりの罰を受けることになる。彼には悪意はなかったようだが、機密情報を漏らしてこのような罪を起こさせる要因を作ったわけだからな」

情報源は鑑定士か。

世の中、誰がつながってるかわかんないもんだ。

「何か、私が寝てる間に色々あったみたいだね。

でも、棗は利用されただけで、べつに悪いことしたわけじゃないでしょ？」

「彼は自分の行動によって起きたことについて責任を持つべきだ。彼の手紙がなかったら、露草、君は死にかけたりしなかったのだからね」

それはどうだろう。

棗が報せを送らず、何も知らないでいるうちに皐月が死んでしまったら。

その時自分がどうしていたか、正直なところよくわからない。

「棗の手紙はきっかけにすぎないんだよ、椿。行動を起こしたのは私なんだから、責任をとるべきは私でしょ？」

「無論、君はこれから世界樹の中枢を守り、導くことでその責任を果たすことになる。だが青桐の若造も、それなりの責任はとるべきだ。もとより君が案ぜずとも、さほど厳しい罰ではない。世界樹を守るための結界を構築し、維持するという仕事を命じられているだけだ」

棗が皐月を守ってくれているのか。

ありがたいけど、これだけ巨大なものを守ろうというのは、わり

と大変なような……

うーん、と考えるっていると、それまで黙っていた鮫島少尉が言った。

「これでひと通り話はできたでしょう。先に降ります」

そして椿からの返事を待たず、さっさと動き出す。

私はそれに、声も出せないほど驚いた。

鮫島少尉が世界樹の枝から枝へ、私を抱いて軽々と飛び降りていくからだ。

「露草を落とすなよ！」

上の方から椿が言うのに、「落すわけないでしょう」と不機嫌そうにつぶやく低い声。

そうは言っても揺れるので、反射的に肩にしがみついていると、鮫島少尉は数秒で巨大な樹の頂上付近から、一気に地上へ降りてしまった。

「……君、今わりとすごい身のこなししたね」

ちょっと呆然として言うと、彼はなんでもないことのようにあっさり答えた。

「おれは異能者なんです。書類上は普通の人間で、おれに異能があることを知っているものはいませんが」

はい？

「他の護衛官がごとく負傷していくのに、いつもおれだけ軽傷が無傷だったでしょう。実は、何度か力を使って生きのびました」

「異能者？ 力？」

「まったく気づいてなかったんですか。おれをそばに置いておくために、わざと言わないでいてくれるのかと思ったこともあるんですが」

そりゃー君、かいかぶりつてものです。

「『紅の魔女』の双子の妹にしては、あなたは本当に未熟ですね。仕方がないので、これからもおれが守りますよ」

なんだそれ。

ふと、笑いがこぼれた。

そうして微笑んだまま、言った。

「私にも秘密があるんだよ」

鮫島少尉はゆるぎなく答えた。

「誰にでも秘密はあります」

うん、まあ、それはそうかもしれないけど。

「それに、あんなふうに置き去りにしたし」

「そこはおおいに反省していただきたいところですが、あなたは未熟な魔女ですから、あの時は他にやり方が思いつかなかったのだと諦めてあげましょう。」

ただし一つだけ、条件があります。これは絶対に譲れません」

鋭い眼差しで断言するので、思わずぐくりとつばをのみこみ、緊張して訊いた。

「どんな条件？」

鮫島少尉は重々しい口調で答えた。

「おれを呼ぶ時は「鮫島少尉」ではなく、名前で呼ぶこと」

第二十二話「極東の鴉」

琵琶湖のほとりにそびえたつ巨樹となつた皐月は、「クーがもつていくなら、いいよ」と、砂漠へ枝をわけることについて条件付きで許可してくれた。

私は皐月がくれた“世界樹の枝”（これは本当に植物の枝）の配達人となり、まずはアジア地区の砂漠に植えた。

そしてその枝が魔物の巣と化した砂漠に根付き、ゆっくりと成長して魔物たちの活動を抑える様子を見守る。

これまで関係者以外には明かされなかった世界樹の特殊能力は、「強靱な生命力」。

危険種のような自衛能力は持たないが、枝葉を食われて幹を折られても、根さえ無事なら中枢たる皐月が力を送りこむことでいくらでも再生する、というものだ。

そうして私が運んだ皐月の枝は幾度も魔物に食い荒らされたが、しっかりと根を張り、時間をかけて着実に砂漠へ水と緑を呼び戻していった。

その一方、樹となつた皐月は動けないので、私は琵琶湖に一番近

い地下街【近江】を拠点にして、砂漠への出張がない日はそこから
皐月のところへ通うようになった。

琵琶湖の又シであり、皐月と私の命の恩人である青龍は時折、水
底からのつそりと現れて、私達と話をしたり、湖上に張りだした世
界樹の根に頭を乗せて昼寝をしたりしている。

皐月はすっかりなついていて、「ぬしさま、ぬしさま」と慕い、
青龍の方でも思いがけない隣人を、「悪くはない」と思ってくれて
いるようだ。

私はいつか青龍の気が向いた時、どこかの都市の白龍のように、
皐月の守護になってもらえないだろうか、心ひそかに願っている。

そんな日々の中、【近江】には『世界統合機構』や『魔導院』の
関係者が住むようになり、いつの間にか「通路門」^{ゲート}が設置されて、
核都市になっていた。

今では都市整備であちこちが工事中になっていて、危ないけどに
ぎやかで活気のある都市となっている。

棗は『魔導院』から派遣された魔法使いの一人として、世界樹の
守護結界を構築、維持しながら、【近江】の都市結界の改良に取り
組み中。

時折一緒に酒を飲むのに「お前に手紙なんか送ったせいで、とん
だ貧乏くじだ」と愚痴りつつ、得意分野で活躍できる多忙な生活を、
それなりに楽しんでいる。

私は皐月の枝が砂漠の緑化に効果を上げるようになると、『魔導院』や『世界統合機構』との協議を受けて、次々と他の地へ送りだされることになった。

そうしてしばらくあちこちを飛び回り、いろんな人と会う生活をしていたら、椿が何度か私を「鴉みたいに真っ黒だろう」と紹介したせいか、あだ名がついた。

『 極東の鴉 』

東の果てから世界樹を運んでくる黒羽根の鳥、と。

そこで一度、ちょっとした冗談のつもりで鴉に変化し、世界樹の枝をくちばしにくわえて登場してみたら、思いがけない大歓声で迎えられた。

すると以後の都市で、「うちもそれで登場してくれ」と言われるようになった。

これくらいのパフォーマン스로喜んでもらえるなら、お安い御用だ。

注目度が上がれば、皐月の枝を守ってくれる人が増えるかもしれないし。

私はくちばしに世界樹の枝をくわえ、今日も鴉の姿で空を飛ぶ。

はばたく翼が疲れても、心配はいらない。

「露草」

低い声で私の名を呼ぶ無愛想な男が、いつでも腕を貸してくれるから。

第二十二話「極東の鴉」（後書き）

2011年8月28日、完結。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5867v/>

極東の鴉

2011年8月28日14時17分発行